

平成 25 年度文部科学省「日本/ユネスコパートナーシップ事業」

「ESD・ユネスコスクール研修会 岡山 2013 報告書」

目 次

1. プログラム	1
2. 開会式	2
3. 基調講演	
「学校における ESD の持続発展のために」 江東区立八名川小学校 手島利夫.....	4
4. 実践報告	
(1) 「地域とともに歩む人権教育」 松原市立松原第七中学校 井上享子	17
(2) 「高等学校における ESD 実践について」 岡山県立林野高等学校 内田浩文.....	24
5. ワークショップ	
(第 1 分科会) ESD カレンダーを発展させる	31
(第 2 分科会) 人権教育から ESD を広げる	36
(第 3 分科会) 高等学校における ESD をデザインする	45
6. 閉会式	58

付録：プレゼンテーション資料

1. プログラム

平成 25 年度 日本/ユネスコパートナーシップ事業

ESD・ユネスコスクール研修会 岡山 2013

主催：文部科学省、岡山大学

共催：岡山市教育委員会

後援：岡山県教育委員会、ASPUnivNet

テーマ：学校における ESD の持続発展のために

日時：平成 25 年 8 月 7 日（水）13：15～16：30

場所：岡山大学教育学部 5207、5301、5303、5307 教室（岡山市北区津島中 3-1-1）

プログラム：

13:15-13:25 開会式

13:25-14:15 基調講演 「学校における ESD の持続発展のために」

江東区立八名川小学校 校長 手島利夫

14:15-15:15 実践報告

(1) 「地域とともに歩む人権教育」

松原市立松原第七中学校 指導教諭 井上享子

(2) 「高等学校における ESD 実践について」

岡山県立林野高等学校 指導教諭 内田浩文

15:15-15:25 移動・休憩

15:25-16:20 ワークショップ

(第 1 分科会) ESD カレンダーを発展させる

(第 2 分科会) 人権教育から ESD を広げる

(第 3 分科会) 高等学校における ESD をデザインする

16:20-16:30 閉会式

2. 開会式

○司会 住野好久（岡山大学大学院教育学研究科）

それでは、定刻になりましたので、「E S D・ユネスコスクール研修会 岡山2013 学校におけるE S Dの持続発展のために」と題しました研修会を始めさせていただきたいと思います。本日、全体的な進行を担当いたします住野と申します。よろしくお願いいたします。では、本日、この会を開催するに当たり、岡山大学大学院教育学研究科長の加賀先生よりご挨拶いただきたいと思います。

○加賀 勝（岡山大学大学院教育学研究科）

皆様こんにちは。教育学研究科の研究科長の加賀でございます。本日、基調講演としましては、東京都江東区立八名川小学校の手島校長先生にお話しいただく予定になっております。また、実践報告としましては、大阪府松原市立松原第七中学校の井上先生、それから岡山県立林野高等学校の内田先生からご報告をいただくという予定になっております。その後、休憩、移動を挟みましてワークショップまで、長時間でございますけれども、今回が学校関係者の皆様のE S Dに関する理解を深め、学びあいつつ活動を広めていただくため有意義な時間となればと思います。どうぞよろしくお願いいたします。



○司会 住野好久（岡山大学大学院教育学研究科）

加賀先生、ありがとうございました。

それでは、本日の研修会の趣旨とプログラムについて簡単にご説明したいと思います。現在、全国のユネスコスクールの支援をするために大学間のネットワークが組織されています。岡山大学を事務局校として全国17大学が、そのネットワークに加盟して、幼稚園、小学校、中学校、高等学校のユネスコスクール加盟申請や実践支援を実施しています。その大学間のネットワークが、ユネスコスクールの質的な向上を図るために各地でユネスコスクール研修会を開催しておりますが、本日の研修会はその一環ということになります。特に岡山県の学校におけるE S D活動では、学校全体でのE S Dの推進、教育課程にきちんとE S Dを位置づけ、多様な教育活動をつないで実践すること、E S Dカレ

ンダーを作って、それぞれの教科・領域で行われているE S Dを相互に結びつけて活動を深めることなどが大きな課題になっていますので、本日の研修会では、これらの課題との関わりで八名川小学校の手島校長先生に基調講演をいただきます。

それから、岡山の中学校のE S D・ユネスコスクール活動を是非充実させていきたいと考えていますが、岡山のE S D・ユネスコスクールを中学校で展開していくために何が手がかかりになるのかを考えたときに、岡山では以前から人権教育について分厚く実践の成果を蓄積してきているので、そこを手がかりにしながらE S D・ユネスコスクール活動を展開できるのではないかと考えました。

それで、人権を手がかりにしながら、人権にとどまらず、広くそれを人間関係として拡張しながら、E S D・ユネスコスクール活動に取り組んでいる大阪の松原市立松原第七中学校の取り組みを井上先生にご紹介いただくことといたしました。

そして、従来から岡山県は高等学校のユネスコスクール活動は実績を挙げてきているわけですが、それを限られた学校だけではなくて、より多くの高等学校で共有しユネスコスクール活動を充実して行っていただきたいという意味で、E S Dに精力的に取り組まれている林野高校の実践を内田先生にご報告いただくこととしております。

本日は、基調講演と実践報告の後、3つの分科会に分かれてワークショップをすることにしております。これらが充実した学びの時となりますようご協力をよろしく願いいたします。

それでは、さっそく基調講演に移らせていただきます。

本日の基調講演の講師の手島先生は、東京都江東区立東雲小学校の校長をお勤めの後、現在、江東区立八名川小学校の校長をされていらっしゃいます。八名川小学校は、昨年度、E S D大賞を受賞されました。また、手島先生は、校長先生としてご活躍されているだけではなく、例えば政府・関係省庁連絡会議による国連E S Dの10年円卓会議の委員や、日本ユネスコ国内委員会教育小委員会外部有識者、あるいはユネスコスクール世界大会準備委員会委員として、日本のユネスコスクール、E S D推進の中心としてご活躍されている先生でございます。

では、今日はたっぷりと手島先生にお話をいただきたいと思います。

3. 基調講演

「学校におけるESDの持続発展のために」 手島利夫（江東区立八名川小学校）

皆さん、こんにちは。東京都江東区立八名川小学校の校長の手島と申します。限られた時間ですが、いろいろな話をさせていただきたいと思います。どうぞよろしくをお願いします。

まず、八名川小学校はどんなところにあるのかというと、両国に近いのです。JRの両国駅に近く、地下鉄の都営新宿線と大江戸線の森下駅が最寄りの駅で学校の近くをお相撲さんが平気に歩いていたりするような町です。東京の下町なのです。隅田川花火もにぎやかに上がるのですが、残念なことに今年は雨で途中で中止にな



ってしまいました。私も、もともと両国の育ちなので、子どもの頃は花火の日は明るいうちに走って家に帰ったものです。何で走るのか、よくわからないのですけれども走って家に帰るのです。家にお客さんがいっぱい来てくれて、そこで酒盛りが始まったりしてにぎやかでした。でも、家の窓から花火が見えません。花火を見るには、窓枠から乗り出して上を見ると、ドンと上に開く、そんな場所だったのです。

八名川小学校は、私が着任する前は国立教育政策研究所の研究指定をいただくなど、俳句の教育を熱心に進めていました。私が着任してESDなどと言ったら、みんな、何だそれはということで、先生たちがきょとんとしていました。校区は江戸時代に海岸線を埋め立ててつくられたような町ですので、深川井として知られていますが、その辺を掘ればいくらでもアサリが出てくるので、それをみそ汁にして冷や飯にぶっかけてぱっと食べてまた仕事に帰っていくという労働者の町だったわけです。そこに私が赴任したものですから、どうなるのか、みんなびっくりしたのです。俳句の教育がなくなってしまうのではないかと心配したのですが、これはESDの中にしっかり入るのです。国際理解とも関わる自国文化の理解にきちんと位置づけるのだから、これは大事にしてやっていきたいと思います。ということで今でも続いています。

さて、岡山はユネスコスクールに加盟した学校あるいは加盟しようとしている学校がたくさんあると聞いております。ユネスコスクールは、ESDの視点を取り入れた教育を推進する拠点なのです。世界180カ国の9,000校の中で、国内では、現在、583校になっていて、来年の岡山での世界大会の時

にはきっと700校を超えているだろうといわれています。ユネスコスクールとはそういう教育ネットワークへ参加するということなのですが、これが583校になったからとか、700校になったから何だというようなものです。なぜなら、小・中・高、それから大学まで入れて全国で約14,000校ある学校の中の1.5%ぐらいにしかならないのです。それだけの学校がE S Dに取り組んだからといって、世の中が変わるわけではないではないですか。持続可能な社会が実現するわけではない。でも、私たちは何を指すのかといたら、E S Dを推進する拠点校としてしっかり役割を果たすことだと思います。私は保護者には、ユネスコスクールはユネスコの日本におけるモデル校ですという言い方で伝えています。研究の指定校になったと思ってやってみたらどうかと考えているのです。

中国地方には、今、61校のユネスコスクールがあるそうです。すばらしい数があるなと思っています。いよいよ来年は、岡山のすぐれた実績、そして熱心な先生方が大勢いらっしゃるということもあって、この中国地方を中心にして岡山が国際大会の開催地になります。そして、愛知と並んでその世界大会を進めていく中心地になるのだと思っています。しかし、そこがゴールなのかというと、私は決してゴールではないと思っています。というのは、2014年は時間が来れば終わります。国際大会も、来年の11月が過ぎれば終わっています。それではそこでE S Dは終わりになるのか、そして終わらせていいのかについてはやはりしっかり考えていく必要があると思います。そのためには、E S Dを何のためにやるのかということをきちんと理解しておくことが大事なのではないかと思います。なぜ、学校でE S Dに取り組むのでしょうか。校長が言うからですか。それもありますね。それでは、校長は何でやるのですか。教育委員会がE S Dを勧めるからですか。それもありますね。忙しいのに仕方ないな、またいろいろ言ってきて、学校はそんなに暇じゃないなどといった声が聞こえるような気がします。やれと言われたので仕方なくやるという動機でスタートしたとしても、E S Dに何の意味があって、私たちがどういう気持ちでE S Dに取り組むのかということが大事だと思います。そうでなかったら、大会が終わったらE S Dも終わるのです。そして、ああ終わりました、よかったね、しゃんしゃんしゃんということになります。そういう研究会などは幾らでもあるでしょう。それで学校は変わったかということと変わらない。研究会が終わればそれで終わりというような、そういう研究をやっている学校は変わらないし、教育もさほど変わらないと思うのです。E S Dに取り組むことで学校や日本の教育が変わる可能性が本当にあるのだったらそこにかけてみたいなと私は思っています。

私は、学校でこういうことを子どもに聞くのです。「あなたたち、何のために学ぶのですか、勉強しろと言われるからやるの、それとも自分がやりたくてやるの、何のためにやるの?」と言うと、子どもたちは結構正直で、「私は大人になった時にやりたい仕事があるのでその仕事につけるように今

から頑張っている」などと答えるのです。「何になりたいの、へえ、そんなふうになりたいの、偉いね」と話します。それから、「先生、ただ勉強するだけじゃなくて、立派な人になりたいのです」ということを言う子もいるのです。それもすてきなことだと思います。

では、何のために学ぶのかというと、テストで点数がとれる、計算が早くできる、漢字が書けるなどのこともうれしいのですが、それだけではありません。では、その先にそれを使って進学するため、あるいはいい会社に就職して暮らしがよくなるためでしょうか。それもいいのですけれども、企業も倒産し、職がなくなってしまうこともあるではないですか。企業に入ってそこで言われたことをやっているだけが自分たちの人生なのですかということになります。

私は、子どもたちに何かを教える際に、子どもたちの現在の課題、あるいは彼らが生きていく時代における課題を考えて教育というものを捉えていきたいなと思っています。日本の子どもたちの抱える課題はいろいろあります。たとえば、外国の子どもたちに比べて日本の子どもたちは自信を持っていないという課題があります。それから、携帯電話やいろいろなアプリで情報の交換はできるけれども、実質的な人間関係をうまく築くことができない、あるいは、うまくいかないことに怯えているという課題もあります。皆さん、そのような感じがしていませんか。小学校の1年生、2年生は元気よく手を挙げるのです。「はい、はい、何で俺を指さないの」と自分をアピールするのです。しかし、その子の手が、学年が進むにしたがって下がり気味になります。そのうち、手が挙がらなくなり、顔も上げなくなったりするような子どもが多くありませんか。おそらく、先生方の学校はそういう子ばかりではないと思いますけれど。

実は、八名川小学校でも目立つことを極端に恐れていた子どもがいました。その背景には、公平でない人間関係がありました。「あいつに何か言われたら自分はやっていけない、目立ったらだめだ」と言うのです。「あいつしゃしゃってるね」とひとこと言われると、即座に居場所がなくなるのだそうです。「しゃしゃってる」というのはしゃしゃり出ているという意味なのだそうです。「一人だけ目立ちたがって格好つけたがって、何やってんだよ」と思われるのが怖いので発言しなくなる。そのような中で、厳しいことから逃避するようになり、ゲームに逃げ込む子どもも多いと聞いています。これは、日本の子どもたち全体の問題でもあるし、また中学校でもそういう子どもが多く見られます。放っておけば、今はうまくいっている学校でも、すぐこうした状況になる可能性があるという気がします。それでは、彼らにどういう将来が待っているのでしょうか。世界の状況あるいはその中の日本の状況を見てみると、かつては、日本発のさまざまな製品が世界を圧倒していた時期もありました。それが様々な分野で、中国や韓国やその他の国々に世界シェアを奪われ日本のシェアはがた落ちになってしまいました。その結果、大企業でも国内の主力工場を閉鎖するなどのことも起こり働く場

所も少なくなってきました。

7月29日の『週刊現代』には、2020年にはIT化、ロボット化が進んで仕事が奪われ、国際化が進んで日本人の仕事が奪われる、と書いてありました。2020年というあと7年です。どういう仕事がなくなると書かれていたと思いますか。

工場の関係の労働者が仕事を奪われるかもしれないですか。確かにそう思います。プレゼンテーションの画面を見てください。このような仕事がなくなりそうだとされています。そういえば、電車の運転手は既になくなりはじめています。お台場を走っている「ゆりかもめ」という電車には運転手もいないし車掌も乗っていないのです。駅員さんに用があった時、駅で降りても駅員さんがいない駅もあるのです。始発駅と終点駅しか、証明書などは出してくれないのです。スーパーマーケットのレジも買い物客自身でもらうレジも増えてきています。そのうち、それが発達してくれば、ICカードなどを商品につけ出口を通るだけで代金の引き落としまでできてしまうというようなことになるのではないのでしょうか。プログラミングなども、別に日本で東京、あるいは岡山のプログラマーに頼まなくても、「こういうプログラムをしてくださいね」と注文すれば、インドからメール添付で送られてくるという時代になっています。自動車の燃費がよくなり、1ℓあたりの走行距離が倍になれば、ガソリン使用料が半分で済むことになり、ガソリンスタンドも今ほどは必要なくなります。実際に、最近ではガソリンスタンドが相当減少しています。

東京の私立の中学校や高等学校では、正規の教諭が随分減っています。学校の知名度を上げるためにつくられた優待生、特待生の教室には優れた先生を配置する。あとはどうするかというと、講師を会社から派遣してもらい、学校を運営していくというのです。経営がよければそれでよく、学校の知名度は上がります。つまり、知識や理解を伝えることにしか考えの及ばない教員は必要ないといわれているのです。それから、テレビを通じた授業などが進めば、そういった優れた先生の授業をインターネットを使って配信すれば済むことになります。そうすると、大勢の先生が個別に授業をする必要はなくなっていきます。

事実、小学校の中でもいろいろな職が今までなくなってきました。私の勤めているこの何年間を考えましても、警備員や学童擁護員がいなくなりました。また、調理師の正規職員は今、私の勤務している区にはいません。どのようにしているかということ、給食関係の施設は公設ですが、民営化して民間の会社に委託しています。すると、そこから人材が派遣されてきて、その人たちが給食を作って子どもに食べさせます。レシピは栄養士が作成していますが、そのレシピをもとに指示する人がいるのです。それと同じようなことが、教員にも遅かれ早かれ来ると私は思っています。今、用務主事が少なくなってきました。また、事務主事についても、センター校をつくり、そこに所属する1名の

職員が周辺の学校の何校かをまとめ、連絡体制をとるようになってきています。事務員も将来的には必要なくなります。そのように、子どもたちの働く場がどんどん奪われていくわけです。今日、苦情処理をしているコールセンターなどは、日本語ができ、苦情処理のノウハウが伝えられ、インターネット回線でつなぐことのできる場所であれば、中国大陸のどこかの町にあったとしても一向におかしくない時代が来ているわけです。

それから、世の中がどんどん発展することによって思いもよらなかったことが起こります。3年前、私もこのようなことが起こるとは思ってもみませんでした。そして、それだけでは終わりませんでした。原発の問題は大変大きな問題ですが、なかなか一つ起こると片が付きません。そして、それを回避するために本当に大勢の人がつらい思いをしないとイケないのです。

私は、温暖化に関するデータを見て本当にそうになったら大変だなと思ったのが2007年3月でした。当時は未来のデータだったのですが、そのとおりになりました。そして、今それがさらに進んでいるとも言われています。写真で見るときれいなことがたくさん起こるようにしか見えませんが、そのようなきれいごとではないと思います。近年、集中豪雨も大変な被害を出していますし、砂漠化もひどいと聞いています。これらは、とどまるどころを知らず、ますます進行するだろうと言われていきます。このような時に、私は生きていたらどうなるのだろうと思ったのです。この時、2031年のことを考えました。

私の娘は今20歳ですが、このような世界で暮らして、38歳になっています。きっと一生懸命色々なことをやっているのではないかと思います。子どももいるかもしれません。でも、その子どもは、安心して暮らせているだろうか、つらい思いをしているのではないかと私は今、不安を心に抱いているのです。

先生方はいかがでしょうか。あと18年です。そんなに遠い将来ではないのです。私たちの教え子はどのような生活を送るのでしょうか。彼らがどのような世界で生きていかないとイケないのかということ考えたときに、私たちは、やはり真剣に考えざるを得ないのではないかと思います。そして、それは18年後を通り過ぎててもなお、強く激しくなってくると言われているのです。実際は、その年になってみないと本当かどうかはわかりませんが、ただ、一つのことが起こると関連していろいろなことが起こりますし、それが世の中を変えていく力となっていきます。また、厳しい地球環境だけではなく、インターネットが発達してきたことなどで、1週間である国の政権が倒されてしまうなどということがこれからも起こってくるのではないかと思います。それは、外国の話だけではなく、日本でも同じように急に世の中が変わっていくということが起こりうるわけで、不安定な激しい変化の世の中だということは確かです。

そこで、どういう将来が待っているのかという話にもう一度戻ると、厳しい就職戦線、グローバルな労働市場。コストで比較され、能力で比較される。そういう時代を生き抜く能力が求められていくのだらうと思います。そして、その時に必要な能力とは何かということも考えていかなければならないと思うのです。つまり、先生は、ただ教科書どおり知識を伝えて理解を進めればいいのかという問題です。では、そういう時代を生きる子どもたちに求められる能力とは何でしょう。これについて、先生方それぞれがお考えいただき、いくつか書き出してみてください。

私もいろいろと考えたのですが、もしかしたら同じようなことを考えていただいたかもしれませんし、私の考えている以上のことを先生方が考えていらっしゃるかもしれません。その場合は、教えてください。

一つは、創造的なコミュニケーション能力。もちろん英語も使えたほうがよいに決まっています。しかし、ただ言葉が話せるだけではなくて、お互いに気持ちを伝え合って聞き合って、お互いに学び合ったことから、今までに考えつかなかったような新しい何かが生まれるような、創造的なコミュニケーションができる能力。ただ、知識を伝え合うのではなくて、そこから何かを生み出せるような力がどうしても必要だらうと思います。

もう一つは、問題に気づくということが大事だと思うのです。昨日の新聞記事の中にも、アメリカの学者のコメントが掲載されていました。「問題に気づいて、そしてその気づいた問題について考えたり、学んだり、それを話し合ったりしながら解決していく能力、問題解決能力がどうしても必要だ」と。このことをしっかり取り組んでいくためには必要な基盤があるわけで、それが健康や体力でしょう。そうすると、これは誰かが言っていることにそっくりなのです。この3つのことで。

言葉のニュアンスが少し違うのかもしれませんが、「生きる力」とは、問題解決能力でありコミュニケーション能力であり、それを支える健康や体力だとまとめることができます。それは、ただ生きる、ぼんやり生きるのではなくて、厳しい時代を生き抜く力なのだと考えていく必要があります。ですから、私たちはその「生きる力」の要素をしっかり捉えて、それを子どもたちの学習の中に落とし込むことができるかどうかが大変なことだと思うのです。困難な世界に立ち向かい、さまざまな人と力を合わせて解決し、よりよい未来をつくろうと行動する子どもを育てようとする時、これは持続可能な社会づくりを目指した取り組み、つまり、ESDの目指す子どもの像と「生きる力」がつながっていると思うのです。このようなことは、国立教育政策研究所の資料などでもまとめていただいていますので、参考にさせていただけたらと思います。

つまり、私は「生きる力」の教育は日本の全ての学校でどうしても取り組まなければならない緊急の重要な課題なのだと思うのです。別にやらなくてもいいということではなくて、どの学校で

も取り組んでいく必要がある。そういう問題だと思います。しかしながら、どのように進めたら「生きる力」が育つのかということについて、案外、明確でないような気がしているのです。そもそも、それについての意識も薄いので、そういうことを考えずに、「教科書にあるから教えている」という学校が結構あるのです。そのこと自体が少し心配です。ですから、今まで開発されてきているESDの理念や手法をもっと活用しながら、学びをよりよいものに変えていく必要があるでしょうし、ESDの取り組みが日本の教育に与え得る可能性というものを大事にしながら進めていったらいいと考えます。その先に、やはり日本だけで取り組んでいてもどうしようもない問題もあるかもしれませんので、それらは「ユネスコスクール世界大会」等を通じて海外に発信していかなければいけないことだろうと思っています。改めて言いますが、ESDは何のためにやるのですか。「ユネスコスクール世界大会」のためだけではないと思います。その先の日本の私たちの教育のあり方というものを一緒に考えましょう。2014年は、そのよいチャンスになる年だと私は思っています。

さて、ユネスコスクールになるとどのようなよいことがあるのかというお話を少ししておきます。学校、教師、子ども、あるいは保護者や地域にとってはユネスコスクールはどのようなものなのでしょう。

今年の5月27日に、ユネスコスクール加盟校からのアンケート調査をまとめた新聞記事が掲載されました。ユネスコスクール活動によって学校全体のプロジェクトが活性化した、地域での積極的な役割を果たすようになった、学校の評判がよくなった、他の学校と交流が進んだなどがあげられています。これは開かれた学校となってきたということでしょう。それから、もちろん、教育方法も変わってきたことがあげられています。ESDに取り組むあるいはユネスコスクールに加盟すると、学校としてのあり方が変わり、より開かれ、実際、教育方法も工夫されています。私は、そうあるべきなのだろうなと思いました。

1つ注目すべきことは、「学校教育の方針が明確化される」と85%が言っていることです。それはどういうことかということ、教育課程の改善であり、総合を中心としたカリキュラムがきちんとでき、そこで、「生きる力」を学校全体として育てていくという立場が明確になってくるということだと思います。それによって、いろいろな活動が学校としてできるようになるのでしょう。大事なことは、熱心な先生がいなくなったとしても、学校として継続して取り組むようになることなのです。「『生きる力』はどの教科・領域で育てるのですか?」「学校で育てると言っていますが、何の教科で育てるのですか。そのような時間はないでしょう。また、面倒なことをやるのですか?」と問われることがあります。そういうことではないのです。そもそも、学校には「生きる力」の時間などないのですが、学校教育全体を通じてやるしかないのです。学校教育全体でやるという場合、何か文言を書い

ておけばそれでよいということではありません。「学校教育としてこれでやる」という校長の方針が明確に打ち出され、それが教育課程に書き込まれないといけないのだと思います。そして、それを職員が再確認し、合意して一つ物事が進むわけなのです。学校はそういうところなのです。ですから、カリキュラムが絶対大切なのです。学校教育全体で「生きる力」を育てるといったときに、こういう考え方が大事なのです。全ての教科・領域を横断的、総合的につないだ教育の姿をつくらない限り「生きる力」など育つわけがありません。今までの授業を同じようにやっていて、その授業の中から勝手に「生きる力」がいくつも育ってくるということはありません。だとすれば、どう変えていくのかというと、やはり横断的、総合的な学習のあり方が重要になってくるのだと思います。

さて、ユネスコスクール活動によって教師については、各教科とのつながりを意識した指導の進展、地域に根差し、体験を通じた学びの定着、指導資料の蓄積と更新、問題解決的な学習の充実というよさがあるのだそうです。私が「ESDカレンダー」を作ったという話をしたのですが、結局そういうことだったのかなと思うのです。教科・領域をつなげて、いろいろな学習内容を結びつける。それも、視点を持って結びつける。そして、スキルの育成も大事にしていく。八名川小学校、あるいは東雲小学校の時からそうなのですが、この4つの視点を教科・領域をつなぐ視点として使いました。もともと「持続可能な社会」と言ったときに、環境の問題が一番大きく扱われていました。持続可能な環境が生まれつつあるという中で、どうしていこうかということが出発点でもあったと思うのです。1950年代頃から、日本でも公害が随分ひどくなりました。それに対して、環境庁（現：環境省）が生まれたり、環境問題に対するいろいろな取り組みも行われてきました。それが教育の中にも広がり、いろいろな環境教育のあり方として資料も作られ、実践されてきているわけです。

しかし、環境問題の改善を環境教育だけでしていくのかという問題があるわけです。つまり、これは私たちだけが取り組んでも結局はどうにもならないでしょう。だとすれば、やはり国際的な協力のシステムをうまく使い、それを生かして取り組んでいくしか、地球規模の環境を何とかすることはできないわけなのです。そうすると、国際的な協力ということが大事になります。しかし、言葉も宗教も違うでしょう。国の考え方も、システムも違います。文化も違いますし、そういう国がどのようにして協力し合うのかといった時に、お互いの違いを尊重し合えるかどうかが大変になるわけなのです。多文化理解と、お互いの文化理解なのです。違いを違いとして認め、そしてそれを尊重し合うということが大事になってきます。そういった国際理解の観点も大事になってくる。そして、それを進めるためのベースというのは、「お互いに肌の色も言葉も違うけども、お互いに人として大事にし合おう」というような、人権や命として尊重し合うところが大事になってくるわけです。人が人として命を永らえるには、どうしてもこの環境の中で、よりよい環境で何とか生きていくしかない。こうい

うつながりの中で私たちは物事を考えていかなければならないのです。そうしたときに、ユネスコスクールの4つの視点が、うまく教科・領域をつなげるとしたら、大事な視点かもしれないと思いました。そして、これが教科・領域をつなぐ視点として使えるかもしれないと思ったのです。これがESDカレンダーの出発点なのです。

ユネスコスクールは583校で、日本の学校全体からみると1.5%に過ぎません。その1.5%の学校だけがESDカレンダーに取り組んでいても意味がないのです。つまり、日本全国の小学校・中学校・高等学校・大学がうまく基盤を生かしながら教育のシステムの中にESDカレンダーを位置づけることができないとだめなのです。校長は皆、「ESDカレンダーはユネスコスクールのものである」と考えるでしょう。教育委員会もそうかもしれません。「あれはユネスコスクールでやっている、そういう教育ね」「いろいろな教育の中の一つでしかない」というように思うのであれば、日本の教育は変わらないのです。これを何とか軌道に乗せてやらなければいけないのです。そうでないと、私たちが取り組もうとしていることは点で散らばっているだけのものになり、全体になり得ないのです。

そうしたときに、私は、これをもう少し工夫できないかとの4月からずっと考えていました。本校の研究主任とも話したのですが、国際的な協力システムの理解というのは実際に「ESDカレンダー」を作ってみるとそんなにたくさんはないのです。「文化理解」と一緒にして、「国際理解」あるいは、そこに「協力のあり方」というのを追加すればよいのではないかと。そうすれば3つにできると思ったのです。

現在は、各教科・領域の学習スキルなどをつないでいくようにしていけばよいのではないかと考えているのです。本当にこれが「学習指導要領」に掲載されるとよいなと思っています。「学習指導要領」では、教科・領域をつなぐ視点についてこのように書かれていました。これは先生方ご承知のとおりだと思います。さて、これを先ほどの「情報」を「情報スキル」というふう考えたので白枠に入れたわけです。「環境」は「環境」。「福祉・健康」は、「命・人権」。地域のよさを子どもたちが調べたりするのによく行うテーマの「伝統文化」、「人々の暮らし」は「文化理解」。職業や自己の将来に関する学習とは、生き方である。考えていくと、「キャリア」は「命・人権」に入れてもよいかもしれないですし、他に入れてもよいかもしれません。何かよいアイデアがあれば教えてください。

要するに、この4つにしたらESDカレンダーを全国的につくれるのではないかとという視点だということですが、しかし、これはまだ、つい先週あたりに作ったばかりなのです。もし、このようなものが全国に広がっていったらよいなと思っているのです。先生方が、もしこのESDカレンダーに可能性を感じたら、いろいろなところで「これでやってみたら」と提案していただいたらと思うの

です。それによって、日本の教育あるいは総合的な学習の時間を動かしていく可能性が出てくるのであれば、それはうれしいことだと思うのです。

少し話はずれますが、東京都には、生活・総合の研究会というのがあり、私は地区の代表の地区部長として出ていました。すると、各地区の代表が同じことを言っていました。部員が定着しないのです。学年が変わって教科の研究会にはいくけども、総合にはなかなか定着してくれないのです。若い女性の先生が多いのです。生活科の担当者ということで1、2年生の担任になった先生が参加します。すると、「学校としての人材はもう出しました」というかたちになるため、結局集まってみると生活の担当の先生が半分以上いて、各学校の総合を動かせるような人がほとんど集まってこないのです。そういう状況ができています。つまり、生活・総合は、教科の代表のような先生が来るだけで動かそうとしていたら研究にはならず、学校のカリキュラムとしての総合はつくれないのです。ですから、学校の中にきちんとした生活・総合のカリキュラムがきちんとあり、各学年で、毎年、更新・改善されながら続いていくというようなシステムをつくっていきける人がその部会に出てこれないところにももしかしたら問題があるのかもしれませんが。だとすれば、やはりそれを動かしていけるのは、生活・総合部員だけではなくて、各地の校長あるいは教務主任クラスの人たちが考えて学校全体をつくっていくという必要があるのだろうと思っています。

地域に根差した体験を通した学びの定着ということでは、地域人材の連携というのはとても大事だと思っています。いろいろなNPOや区役所の取り組みなどもここに位置づけていけばよいです。

ESDカレンダーというのは、東雲小学校の時に上半分を作りました。こういうつながりの中で学習活動をつなげていこうということで作ったのですが、単元名だけであり、学習活動の狙いがはっきりしないのです。何時間使って実施するのか、どのような学習活動があるのか、地域の人材はどう生かすのか、はっきりしていませんでした。そこで、この下半分も作ったわけです。そうすると、上と下とでカリキュラムになります。例えばこれは5年生では、こういうカリキュラムがあるので、これを土台にして今年はこの点を工夫しながらやっていきたいと思います。年度の終わりにこれを書き換えながら、「このようにしたらもっとよかった」というかたちにして次の学年に引き継ぎます。これが、学校が総合を定着させるために大事になってきます。継続的な指導が可能になりますし、指導する内容や活動が明確になります。このことが大事なことだと思っています。

八名川小学校では、職員室のパソコンを開き、「23年度ESD」というのを開くと、各学年のフォルダがあって、「2年」を開くと「町探検」という項目があり、その時のワークシートや町探検の時の子どもの様子の写真や授業の指導案、単元展開表や教材などが出てきます。これをもとにして今年の授業やワークシートを手直ししてみたり、写真を見ながらイメージを膨らませてみたり、「このお

じさんのところに行けばこんな話が聞ける」ということや、「礼状はこれを少し直せばまた使える」というようにしています。こうしたフォルダを作り、「情報はすべてここに入れてほしい」という約束をしておけば、共有のものができます。それが学校の財産となり、授業をよりよくしていくことができるわけです。授業を進めていくのは理念などいろいろあるかもしれませんが、しくみとしてもこのようになっているといいなということです。

「問題解決的な学習の充実」といいますが、これだけで実際授業するには具体性に乏しいものがあります。そこで、「単元展開表」というのを作りました。今まで単元展開を考えるときに、事実認識や問題意識の集約化などのように、難しい言葉で説明していたのです。それを分かりやすくして、「学びに火をつけろ」「子どもの学びにどのようにしたら火がつくのかということを考えましょう」ということにしています。先生方は、ただ、知識の山を子どもの前に積み上げて意味がないでしょう。そこに少し火をつけて燃え上がった時に、子どもは自分で活動して、調べて、そして進んで何かに取り組むようになるのです。だとすれば、子どもの学びに火をつけられる先生でない場合は、これからの時代の教師としてどうなのでしょう。十分な力があると言えるのでしょうか。この間、ある先生が「着火用のライターがうまく点火しませんでした」と言うのです。その時「どこがうまくいかなかったのかな」「何か少し工夫すれば点火したと思うのだけれども何だろう」などというような話が職員室でできるようになると学校は変わると思うのです。

つまり、単元展開に教師が力を注ぐようになってきた時に、周りが変わると思います。子どもが、使命感や、この時代に生きていくための責任感などを感じられるような題材をぶつける。そして、そういう気持ちを持って学びが進む流れを教師がつくっていけばよいのだと思います。こうした学びを重ねるとクラスはどのようになってくるのでしょうか。やはりいろいろなアイデアがあふれ、少数の意見も大事にする、発信力、表現力が豊かになります。つまり、児童全員が座り教師が「はい、わかった人」と言われて、児童が「はい」と手を挙げていくような進め方では、手を挙げられない子というのがどうしても出てしまいます。いろいろなアイデアを出し合って、それをみんなでまとめていく。そのような活動ができることが大事なのです。つまり、何かできて分かった子どもだけが元気のいいクラスをつくっているのはよくないのです。分からない子どもが、「ここがわからない」「先生どうなっているの?」「みんなどうなの?」「本当にわかっているの?」と言えるような学級をどのようにしてつくるかということが大事なのだと思うのです。そういう学習のスタイルを何とか工夫して作りあげていくことも大事なのだと思います。それで、子どもは「私は友達の頑張ったことを見つけることができます」などと言えるようになるのです。

さて、伝え合うということも大事だということでは、そういう場を学びの最後のところにつく

ります。自分に取り組んでみた結果について、伝え合い、再度、みんなと相談し合うなど、伝え合い、高め合い、相互評価する場をつくる必要もあるのではないかと思います。

八名川小学校では、毎年1月頃に「八名川まつり」というイベントを開催しています。以前は、特別活動の時間に遊びの祭りをしていたのです。高学年がいろいろな面白い遊びのコーナーをつくり、保護者や地域の方々など様々な方を招待します。低学年の子どもたちが来た場合、遊びを一緒にするなどして楽しむという祭りです。「6年生がお化け屋敷をされていてどうするの？それがあなたたちの学びなの？」と思うのですが、実際にしていました。私は、本当は6年生もお化け屋敷をしたいのだということを知っているのですが、あえて「本当にそれでいいのですか？」と6年生に問いかけました。子どもは「いいのです」と答えましたが、私は、少し学びの質を考えようと働きかけ、変えていきました。

私は、着任して3年目になって初めて、保護者や地域に対し、授業について「本校では、ユネスコスクールとしてこのように取り組んでいるのです」というプレゼンテーションをしました。「ESDでこのように取り組んでいきます。本校は、ユネスコスクールになります」などと成果がないうちに言った場合、保護者は不審に思うだけだからです。ですから、子どもたちが変わり始めたり、何かよい形が少しずつ出てきた時にESDやユネスコスクールのことを伝え始めるようにしました。このプレゼンテーションをしたら、保護者からやはり反響がありました。この時、「校内研究は全部公開するから来ていいですよ」ということも伝えたのです。そうすると、PTA新聞に「どのようにしてユネスコスクール活動に取り組んでいるのか」「それはどういう意味があるのか」という解説記事を掲載してくれました。そして、保護者が、「ユネスコスクールである八名川小学校をサポートできることは何だろう」と考えてくれるようになりました。

保護者は研究会の見学もできます。「ユネスコスクールになってこういうことを調べる機会がある」というのをお伝えし、見学していただきました。授業内容は、子どもたちがお互い協働で学び合い、地域のことを知ろうとするものでした。すると、見学された保護者の方から「保護者同士もお互いに信頼し合っていくこと、地域の一員として誇りを持ち、学校や地域の活動をしていくことが大切なサポートなのだ実感した」などのよいご意見をいただきました。保護者にとってもユネスコや世界は遠くにあるのではなく、世界の中に八名川があって、子どもたち一人ひとりと世界はつながっているという視点を持つことは大切なのだと思います。そのようなことを言う保護者が出てきたら、学校は大変うれしく思うのです。そういったことばを支えにしながら、先生たちは頑張ることができるのです。昨年は、「集まろう！つながろう！ユネスコスクール」というタイトルで「ESDパワーアップ交流会」を開催しました。

研究発表会は、どこかの学校が「こういう研究をしました」「これを見に来てください」「私たちはこのように取り組みをしました」という報告や説明をするのを聞いて終わりということが一般的になっていますが、それでは、今までの研究のあり方、授業のあり方と同じなのではないでしょうか。そうではなくて、お互いに取り組みを持ち寄って、そのことを交換し合あうことが大切だと考えます。そこで、ユネスコスクールになった学校が、地域や保護者など、いろいろな関係機関の人たちを交えて「こういう研究会をすればよい」というサンプルをつくったのです。もしかすると、先生方の学校でも教育委員会に対して「こういう研究会をやりたいのです」などの要望を伝えると協力してくれるかもしれません。学校の研究そのものは教育委員会が予算を出しているからです。例えば、八名川小学校でいえば「特色ある学校づくり推進の予算」などという項目で校内研究の予算が算出されるのです。ですから、江東区教育委員会の「特色ある学校づくり支援事業」であれば、主催が八名川小学校でよいわけです。どこかに、もし後援してもらえるのであれば、名前を貸してもらうように依頼すればよいのです。そうすれば、交流会ができます。交流会では、お互いにフラットな立場で意見をいえるよう、発表時間を決めて交流し合えばよいわけです。発表内容に対して意見があれば、よかった点、参考になった点などをお互いにカードに書きポストイットなどで貼り合うことなどをして交換し、それを持ち帰ることもできます。限られた時間であれば、それなりのやり方もありますし、ほかに工夫ができるのかもしれません。

このように、いろいろな学校の授業実践が一度に手に入るようなよい場はなかなかないので、いろいろとところをつくってみてはいかがでしょうか。どうもありがとうございました。

○司会 住野好久（岡山大学大学院教育学研究科）

手島先生は、お話しする多くの材料をお持ちでいらっしゃいますので、時間が足りなかったことに対して申し訳なく思っております。ESDは、やらなければいけないからやるのではなくて、本当に大切であるからしなければいけないのだということをあらためて学ばせていただいたと思います。



4. 実践報告

(1)「地域とともに歩む人権教育」 井上享子（松原市立松原第七中学校）

○司会 住野好久（岡山大学大学院教育学研究科）

それでは、大阪府の松原市立松原第七中学校の井上先生に中学校の実践報告をしていただきたいと思ひます。松原第七中学校は、今年の5月1日に『子どもが先生が地域とともに元気になる人間関係学科の実践』（図書文化社）という本を発行されました。このように、この中学校では、特色ある教育課程を編成されて実践されています。今日はどのような取り組みをされているのかについて聞かせていただきたいと思ひます。

○井上享子（松原市立松原第七中学校）

松原第七中学校の井上です。今日は、こういう機会を与えていただきましてありがとうございます。

本校の取り組みを紹介させていただきたいのですが、まずは、本校が地域とともに開かれた学校にしてきたということでお話しさせていただき、後半のワークショップで本にまとめました人間関係学科について詳しくご紹介させていただきます。

本校のある松原市は、大阪市の和川を挟んだ南側にある衛星都市です。子育てするのに忙しくしているという保護者が多いところで、結構、保護者の関心が学校に薄いところだったのですが、地域の方にいろいろ手を入れていただいて、協力をしていただけるようになりました。本校はいろいろな取り組みを行い、研究指定などを受けているのですが、特に平成15年から人間関係学科という新しい教科をつくる取り組みを7年間しました。このことについては、また、後半でお話します。

本校は、ユネスコスクールに加盟し、「イキイキ七中ESD展」を開催しています。地域の方が撮られた地域の写真、子どもの写真などを展示するというものです。本校の玄関ホールが結構広いものですから、そこに椅子やストーブを持ち込んで1月ぐらいに写真展をします。その中から、PTA会長賞や校長賞をだしています。ユネスコスクールに加盟して実践している新しい取り組みはこの写真展だけなのです。本校では、ふだん私たちがやっていることをやればいいのかということ



で、2008年にユネスコスクールに加盟しました。きっかけは大阪府立松原高等学校からのお誘いで、市で高等学校・中学校・小学校が同時に加盟して何かできることがあるのではないかと、本当に気軽な気持ちで取り組み始めました。

その際、ユネスコ協同学校の学習テーマとESDの教育目標の中から、本校のテーマは、「人権・異文化理解」とすることとし、本校は人間関係学科というのをつくっていますから、ESD教育目標は、他人との関係性、社会の関係性、自然環境との関係性を認識し、「関わり」「つながり」を尊重出来る子どもたちを育てるということにしました。そして、「地域とともに歩む、人権教育に取り組む」ことが本校のユネスコスクールとしての姿であるということでユネスコスクールに加入しました。

大阪でユネスコスクールの交流会をもっていただくことができました。この会は、高校生が中心となっている会でしたが、高校生に混じって、本校の生徒会の役員2名が参加したのです。会の発足当時は、中学校では本校のみが参加していました。参加した生徒2名は、人間関係学科で自分たちが学習したアイスブレイキングなどを披露しまして、高校生顔負けのパフォーマンスができたということで、たくさん褒めていただきました。本人たちは「やったで」と言って、達成感を持って帰ってきておりました。

そういうところからも、今まで自分たちの活動がこれでいけるのではないかと感触を得たのがこの当時でした。本校の様子を見ていただくと、あまりきれいな校舎ではないのですが、学校は1学年3クラス、支援学級3クラスで11クラス、300人程度の学校なのです。小規模ですので、それを生かしたいということで、クラスを取り払って、学年全体で多くの体験学習をしています。その体験学習をする中で、多文化共生は大切にしたいということがありました。どうしてかといいますと、昭和から平成にかわるころに、ちょうど本校の校区に中国から帰国されたご家族が府営住宅に住まれるようになりました。地域の方からいろいろな苦情が出て、地域でもどうしていったらいいのかという問題が起きました。例えば、夕方になって夕涼みのために外へ出て集まって大きな声で話すことやゴミの問題がありました。その地域の方たちは、中国から帰ってこられた家族も地域の人であるので、どうにかしていききたいということで、いろいろな取り組みをしていただきました。後ほど紹介いたしますが、「国際文化フェスタ」というのを企画して中国の方もそのイベントに参加してもらおうということもしておりました。そのような中で、中学校としても日本語教室を開催し、子どもに日本語を教えることなどをしていたのですが、やはりそれだけではだめなのですね。子どもの支援だけでなく、家庭の支援や保護者の支援が必要なのです。例えば子どもの父親、母親が医者に行くということを理由に子どもが学校を休むのです。子どもが病院に付き添い、父親、母親の通訳をしないといけ

ないからなのです。そういう話を聞いたので、「親の通院時には、子どもが学校を休まないように通訳の方に付き添っていただくようにしてもらいたい」ということを行政にお願いに行ったりもしました。しかし、本当にどこに行くにも子どもの力をかりて父親、母親が生活していかないといけないような状態でしたので、日本人、日本の文化と少し違うというので、周りの人たちはやはり違う目で見てしまいます。この違う目で見ている地域の人の目を変えるには、子どもたちが変わらないといけないのではないかとということで、多文化共生に力を入れて教育し出したのが最初でした。

今は、「出会い生き方学習」というのを3年間で実施しています。これは、総合的な学習の時間を利用した学習でして、1年生では「地域での生き方の提示」ということで、命を守るセーフティネット、自分たちの周り、地域で自分たちの命を守ってくれる人がたくさんいる。その人に学ぼうということで、聞き取りをしています。これは、地域の消防団の方が学校に置いている放水の機械を見せていただき、放水を体験させていただいたり、3学期には「地域で共に生きる」ということで、地域の老人たちが集まる憩いの家「恵寿苑」の方と一緒にグラウンドゴルフ大会をしました。最初は、お年寄りの方たちは「中学生って怖い」と言っていたのです。また、「恵寿苑」に行き、お年寄りの方と交流させてもらいました。子どもたちが考えたゲームなどをさせてもらったり、お年寄りが約30人、生徒が90人、一緒になってグラウンドゴルフで交流しました。その後、3学期では、教師が炊き出した豚汁を食べながら、お年寄りの方と交流を深めました。

2年生は、2学期に職場体験をするということで、働くということ、社会で自分がどのような生き方をするのかというのを提示しようということで、1学期は共に生きる社会をつくるということ、障害者問題や多文化、男女共生や部落問題などの問題に対するコースに分かれて学習をしました。シドニーパラリンピックの時、車椅子バスケットの全日本のキャプテンをされていた根木さんが松原市のサポーターをさせていただいているので来校して講演していただき、この後、車椅子バスケットをさせていただきました。

また、女性の消防士に来ていただいてお話を伺いました。大人モデルというのでしょうか。中学生が大人の生き方を伺って話を聞いて、自分の目で確かめてというようなことをしながら、自分の生き方、どのようにして自分が生きていくかということをしています。3学期には、自分の命も含めた生き方を考えるということをしています。

3年生になりますと、「社会を創造する生き方を提示」をテーマに、地域を越えて人とつながっていけるように取り組んでいくことになります。この学年は、修学旅行で長崎に行ったのですが、長崎で地域の方とどのようにしてつながっていこうかを考えました。この右側の写真は「文化を知ろう」ということで、現地で旗作りをした時のものですね。その旗を送っていただいた後、グラウンドに全

員集まりました。みんなが作った旗でたこ揚げをし、旗揚げをしたところです。そのようにして、いろいろな方に出会って生き方や今ある問題を知り、その中で自分がどのようにして生きていくのかというのを考えていこうとしています。そして、3学期に自分のライフコース、生き方を選択するという事で、高校の選択、進路の選択につなげていこうという学習を3年間通して実施しています。長崎に行きました際には、「千羽鶴を作ってみようか」という話になり、全校生徒にお願いし、全員で作りました。

本校の取り組みのなかでも、特に力を入れたのが「多文化共生」です。どの学年でもコースをつくり学習するようにしています。

まず、1年生では、近所にある公民館で毎週火曜日開校している私設の夜間中学校へ交流に行きました。中国から来られている方が一生懸命日本語の勉強をしている姿を見学し、質疑応答などをしながら交流をさせてもらいました。その交流した様子をみんなに知らせるための発表の場も設けています。中国にルーツのある生徒は、日本に来られている中国の家族の方に中国語でインタビューをして、それを日本語に訳してみんなに伝えるために発表をするというようなことまでしてくれました。

2年生では、韓国の文化を知ろうということで、コリアタウンでのフィールドワークにチャンクの講師の先生にお越しいただいてお話を聞き、チャンクの演奏技術を教えていただいています。自分たちで練習して学年の報告会で発表しました。拍手喝采を浴び、本人たちは胸張って、「うまいことできたよ」と言っていました。食文化を知るということでは、チヂミも作りました。衣装などの文化も体験しました。衣装を着せていただいたので、子どもたちは喜んで学び、つなげていくことの大切さを学んだようでした。

3年生は修学旅行が中心行事です。「中国の文化に触れよう」ということで、長崎の華僑の方に案内していただきながら、唐寺の崇福寺を見学しました。長崎の華僑の方と地元の方との触れ合い、きずなの強さなどのお話を聞かせていただきました。その学習発表は、もちろん学年の報告会でもしています。このように本校は「多文化共生」を充実させたいということで、筋を通しております。

そのほかに、子どもたちの自発的な取り組みにも力を入れています。これは本校の中庭です。芝生を敷いて、大変きれいな自然を感じられる、春はタンポポと桜、夏は蝉、そして冬は紅葉ということで、自然の感じられる場所なのですが、そこを利用して、年2回、地域の地域の子どもたちを集めて、中学生が主催のお祭りをしています。「涼もう会」と「HOT×ほっと会」という2つの行事です。これが夏の様子です。地域の子どもが500人ぐらい集まってくれます。子どもたちが工夫して、うちわに絵を描いてもらったり、これは輪投げ大会に参加してくれた子どもにはメダルをかけたり、かき氷を振る舞ったりしています。そのようにして子どもたちが自主的にしたいということをしてい

ます。もちろん、PTAの方も子どもたちの活動には参加協力していただいています。

「HOT×ほっと会」なのですが、いろいろなところで餅つきを披露されている「荘友会」の方に来ていただいて、中学生が餅をつきます。それを中学生が丸め、きなこ餅にして振る舞います。焼き芋もあります。輪投げのゲーム、ボウリング、すべて手づくりです。ボウリングは、がたがたしているところはボールがうまくいけないので、すのこを敷いています。この行事は長年、地域の祭りをしている中で、「私たちも子どもたちを呼んで楽しませたいんや」「何かできへんか」ということで、16年ぐらい前から始まりました。本当に、きっかけは子どもたちの「私たちもフェスタみたいなことをやりたい」「どんなことすんの」などの声からでした。この中庭の横に総合学習室というのができて、冷暖房完備の涼しいところで「子どもたちを遊ばせたいんや」「温かいものを食べてほっとさせたいんや」ということで始まったのがこれです。

地域の方々がいろいろしてくださるのを肌で感じて、子どもたちのほうから、「自分たちもやっぱりやりたい」という声を上げてくれたのがこの行事の取り組みの始まりなのです。

PTAの方は冷やしそうめんやフランクフルトを振る舞いました。約3時間の行事なのですが、多くの保護者の方も来ていただいて、並んでかき氷を待っているというような姿がみられました。今年は8月1日でしたが、今年も盛会のうちに終わりました。

こういう行事を子どもたちが考えたもとなる行事が、11月に行われる校区の「国際フェスタ」です。テントが20張、参加数5,000人、その人数が校区に集まってきてくださるのです。食のブースというのがあり、焼きそばもありますし、餅つき、うどん、校区の教師がしている先生の店でチヂミなどを振る舞います。ワンコインで50円か100円なのですね。どなたでも参加できるようにということで、こういう値段設定にしています。ステージ発表もあります。これは蛇踊りなのですが、地域の方の太極拳や和太鼓の披露などもされて、大勢の人がこのように参加してくださっています。

これが放水体験ですね。プールに消防団の方が放水をしてくださって、子どもの服も用意してくださって、放水体験させてもらいます。子どもたちはこれをするとうちに消防士になった気分で大変喜んでくれます。このように、小学生から大人までが参加するお祭りです。

中学生はどうかといいますと、中学生が独自に出店します。火を使うものがあまりできないので、たこ煎餅やミルク煎餅、カップ麺の販売をしたりしています。毎年、集会でスタッフを募りますが、参加希望者が多く、非常に人気があります。

この写真はバザーの様子です。中学生が地域に「バザーの品物を集めています」と言ってまわります。大阪のおばちゃんは少しでも安く買おうと思って「まけてや」と言われますが、子どもたちは「いや、それはまけられません」などと言って対等にやり合いながら、一つでも多く売ろうと奮闘し

ています。その収益金は、ユニセフに寄付したり、ここ2、3年は東日本大震災の被災地支援に協力しています。中学生は、この日も募金活動をしています。募金していただいたら、地域教育協議会からいただいた鉛筆1本を渡すということもしていました。

ステージ発表では、吹奏楽部が参加しています。この発表は、個人でも参加できます。ダンスであったり、数年前は三味線を披露したこともあります。また、ボランティアスタッフを募集しまして、「エコスタッフ」であったり、子どもと遊ぶ「クリームスタッフ」、そして「お抹茶スタッフ」といって、浴衣を着てお抹茶を振る舞うといったスタッフを募集します。驚くほど多くの参加希望者が集まってくれます。特にこの「エコスタッフ」に関しては、30人、40人集まります。何をするかというと、ごみの回収、分別なのですね。子どもたちが嫌がるようなことなのですが、それをしないことには環境問題にはよくないというので、率先して中学生がしてくれます。「国際フェスタ」に参加し、自分たちの役割を果たしていくことによって、地域の方々が褒めてくださるのです。地域教育協議会の会長は、中学生を褒めてくださいますし、頑張っている姿を見ては喜んでくださいます。このようにして多くの方が協力してくださるので、ご褒美をいただけるのです。ボランティアに参加するとスタンプを押してもらい、そのスタンプの数によって無料券をもらえるのです。うどん無料券だとかチヂミ無料券などを配付していただいています。そして、スタッフは忙しいので、スタッフ用の窓口を特別つくってもらい、優先的に食事をとることができるようにしています。

そして、これがボランティア手帳なのです。中学生が1回ボランティアに行くたびに、地域の方はスタンプを押してください。そのスタンプが4点以上になると、1枚無料券がもらえるという仕組みです。地域の方は、中学生が「ちょっと頑張ってみようかな」と思えるような工夫をし、子どもを褒めてもくださいます。そういう地域の方がいらっしゃるから、子どもたちも、どんどん参加者が増えてくる行事となっています。このボランティア手帳については、「自分たちもやりたい」ということで、中学生たちも生徒会のボランティア手帳「やさしいところ」をつくりました。名前とデザインを公募したのです。ボランティアへの意欲を高めるために、スタンプの集まり具合によって「職人」「達人」「名人」「有名人」の認定を行っていくようにしています。3年間でどのくらいたまったかというのを見ていくのです。

この写真は、花植えボランティアの様子です。校門の付近に飾る花を植えます。これはサンタクロースの格好をしているのですが、12月24日に、いつもお世話になっている地域の公園を掃除に行こうとした時、子どもたちが「せっかくクリスマスイブやねんから、ちょっとクリスマスを感じるような遊びもしようや」と言うので、サンタクロースの衣装を着て、「ジングルベル」などのクリスマスソングを鳴らしながら掃除をしに行きました。その姿を見て、遊んでいた小学生も一緒になってゴミ拾

いをするということもありました。

そして、その公園の物入れが落書きだらけになっていたのです。中学生は「落書きだけやったら簡単に消せるけど、それではまた落書きしてしまうんちゃうか」というので、公園局の許可をもらい、物入れに絵を描くことになりました。中学生は「こうやってやったら、誰も落書きせえへんちゃうか」というので、考えて休みの日を利用して、1カ月ぐらいかかって完成させました。これもボランティアを集めてしています。この公園では、小さな子どもが遊んでいるものですから、その子どもたちも手伝いたくて、「兄ちゃん、何か手伝うことないの」と言いに来てくれることもあります。また、次のボランティアの候補が一人、二人と増えたなというような印象を受けています。

そして、東日本大震災を忘れてはいけないということで、今も募金活動を定期的に行っています。松原駅の街頭に立ちまして、呼びかけているということで、少しでも何か役立つことはないかと、子どもたちは考えて取り組んでいます。達成感というか、やり切ったという気持ち、そういうものがやはり子どもたちには大切だと思うのです。そうしたことによって、「誰かが喜んでくれる」「誰かのためになる」ということで、自己有用感も生まれてきているように思います。生徒会だけでなく、本校の生徒全員が「人に何か役立つことはないやろうか」「人とつながる方法はないやろうか」などの意識を深く持ってくれている。それがこの生徒会のボランティア活動であったり地域でさせていただいているボランティア活動ではないかと思っているのです。

松原第七中学校の中学生は、地域とつながることによって、大きく成長していったように思います。地域とともに歩んで、大人のモデル、大人の姿を見て、そこから自分の生き方のヒントを得たり、自分がどうしていけばよいのかを考えることができる機会も与えてくれます。そして、将来、今の中学生たちが地域のおじさん、おばさんとして、また地域で子どもを育てている、そういう存在になってくれることをこちらは期待しながら、地域で活動をしています。最近では、その候補生がだんだん増えてきており、手伝いにも卒業生が参加してくれるようになりました。私たちは、そういう姿を見るのが一番うれしく、それを楽しみに取り組んでいます。特別何も変わったことをしていません。ただ、自分たちが今までしていることがESDの「人を育てる」ということにつながっているのではないかと思います。今も活動を続けています。以上です。ありがとうございました。

○司会 住野好久（岡山大学大学院教育学研究科）

ありがとうございました。生徒たちが地域に出ていき、地域とつながって生き生きと活動している姿というのが本当に印象的だなと思いながら、聞かせていただきました。

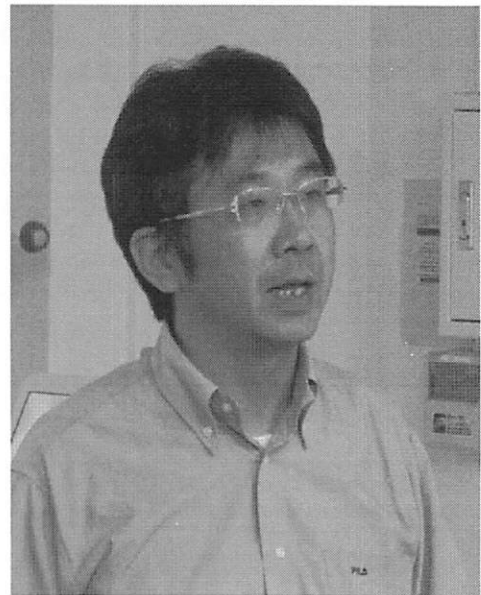
(2)「高等学校におけるESD実践について」 内田浩文（岡山県立林野高等学校）

○司会 住野好久（岡山大学大学院教育学研究科）

次に、岡山県立林野高等学校の内田先生に実践報告をお願いしたいと思います。

○内田浩文（岡山県立林野高等学校）

岡山県立林野高等学校の内田と申します。林野高等学校は、岡山県の北東部、鳥取県と兵庫県に接する美作市に位置しています。御多分に漏れない中山間地域の学校ですので、美作市内に高校は1校しかありません。県北の高校はどこも共通しているのですが、慢性的な定員割れに悩まされている学校です。この場で発表させていただくのですが、先ほどの松原中学校からの報告にもありましたが、本校でしていることというのは、突然何か新しいことを始めたということではありません。今までやってきたことをESD的に位置づけることができないだろうかと考えながら取り組んできています。



今日8月7日は、私の実家などでは七夕なのです。七夕というのは7月7日にするもので、旧暦で8月7日にするのですが、折口信夫という学者が、「中国から伝わってきた七夕がこんなに簡単に日本に定着するはずがないのだ」と言っています。というのは、もともと日本にある行事があって、それに七夕という中国から伝わってきたものが重なって定着しているというのです。ESDにしても同じことであると思います。ないものをつくっていきこうとするとすごく大変なのですが、あるものの上に乗せていくということがESDの中で大事なことではないかと思っています。

本校のESDは「マイ・ドリーム・プロジェクト(MDP)」という名前で総合的な学習の時間に取り組んできたことからスタートしています。私が赴任した当時は、生徒の進路にあわせたグループ構成になっていました。本校は普通科高校ですので、生徒は自分の行きたい大学の学部に沿って自分のグループを選んでいきます。ただ、就職する生徒もいますので、社会系の中に就職というのが入っています。結構無茶だなと思うのは、人文系の中に哲学と心理が一緒になっていたり、理工系ではソフトとハードが別になっていたりしました。担当者が「自分はこういうことを担当できる」という内容を出し、それを生徒の進学先によって分類しているというだけの状態でした。

メリットとして、それぞれの担当に自由に設計が任されるので、担当が自分の思ったようなことができること、生徒は進路希望に密着しているのでは何か勉強しているような気になるということがありました。それから、これは今も続いています、1年生から3年生まで全部縦割りでグループを組んでいますので、先輩たちの様子を見ながら育っていくことができました。

ただ、デメリットとしてはミスマッチの発生があります。例えば「自分は哲学の勉強がしたいと思って入ってみたのに、いまいちだ」となると、1年間ずっとつまらないままで過ごさなければいけないのです。

それから、担当者間の温度差の問題もありました。私が赴任した最初、いきなり任されたのは法律でした。法律についてはさっぱり知識がなく、何をやっていいのかも教えてもらえず、非常に生徒に迷惑をかけることとなりました。

それから、週の中にきちんと組み込んでおらず、「夏休み中にまとめて活動しなさい」という活動もあったので、週の中でまとまった活動しようとしてもなかなかできないということもありました。担当間の温度差というところで、一番顕著に出てきたのが、「うちの学校で進学をしようと思ったら吹奏楽部に入ってMDP国際に行きなさい」というものがありました。吹奏楽部はいろいろなところでボランティア活動をされていました。それから、MDP国際もやはりいろいろなところで活動をされています。活動を重視した推薦入試を受けるのであれば、このMDPしかないというような言い方さえされていたのが、この当時の状況でした。

平成21年に文部科学省から研究指定を受けて、「そんなに新しいことをやる必要ないよ」と言われながら取り組んでいたのですが、研究報告をした後に、教科調査官や岡山県の担当の指導主事の方より、「体験はわかった。生徒も面白がってやっているのはわかった。その先は何があるの」と言われてしまいました。そこで我々は困ってしまいました。確かに体験の場面というのはたっぷり与えていたと思うし、それはそれで生徒も楽しそうにやっているのですが、何を得られたのかを考えたときに、「～をしました、面白かったです」では、悪いけれど小学校の作文と変わらないですね。高校生として体験をする中で、その先に何が見えるのかというのを考えたときに、これは今のままのMDPではいけない、何かを変えていかなければいけないということを考えるようになって、平成22年から活動指針を大きく変えていきました。

今までは、進路学習というところにこだわり過ぎていたということで、そこから切り離していくようにしました。つまり、自分の行き先を考えるのではなくて、どのようにして生きていくのかということを考えていくための時間にするべきではないだろうかということです。それから、本校の中だけで完結してしまうようなMDPも多かったのですが、もう少し外部との連携というのも考えなければ

いけないのではないかと考えながら、活動を組み換えていきました。

自動車に取り付けられているカーナビゲーションは、目的地を設定して道を外れると「目的地を外れました」と怒られますよね。我々がMDPで最初にしてしまったことはまさにこのカーナビだったのだと思います。「君は看護に行くんだよね」と、看護のルートでずっと進んでいく生徒はいいのですが、取り組んでいく中で、「もしかして自分は福祉のほうがよいかもしれない」と思っても、全体の活動は看護に向かって進んでいってしまっていますので、軌道修正がきかない。そのように、ある目的に従ってずっと行くだけの活動でよいのだろうかと考えるようになりました。カーナビ型というもので、例えば進学をすることがゴールであるとするならば、進路が決まった後、生徒たちはどうするのかという問題が出てきてしまいます。高等学校はどこも本校と同じような問題を抱えているのだと思いますが、生徒に対する勉強の動機づけというのはどうしても受験に頼ってしまうようになります。受験に頼ってしまう進路指導をしている以上、我々は受験という束縛を外れた生徒たちを制御するすべを持たないのです。進路が決まってしまった生徒が、授業に対して興味を持たないとしても、それは生徒のせいにしてしまうのですね。進路が決まったから学習しなくても仕方がないということでもいいのでしょうか。カーナビ型の指導をしていたのではどうしてもそのような問題が出てきてしまうので、ゴールは一体どこで考えるか、学びにゴールがあるのか、ということも考えて、活動指針を変えていきました。そしてRPG型（ロールプレイング型）にしなければいけないだろうということになりました。つまり、ある課題が目の前に出てくると、その課題を解決するやり方も複数あります。複数の中からある課題の解決の仕方をとると、その先に進んでいってまた分岐をしています。カーナビゲーションというのが1カ所に向かって突き進んでいくだけであるのに対して、RPG型というのはどんどん枝分かれして行って、たどり着くところも生徒それぞれ変わっていくのです。このように、分岐していき、正解のないような活動にしていく必要があるだろうというところにたどり着きました。

その中で、やはり学校の中に閉じこもってはいけません。いろいろな価値観をもっている人たちと、これから先、我々は仕事をしていく必要があります。みんなが味方であるとは限りません。特に企業などで仕事をしていく場合は、どちらかというとなら敵対するような人たちとも話し合っていく力を持っておかなければいけません。本校は中山間地域の学校ですので、小学校どころか保育園から同じメンバーで育ってきた生徒がいます。異質な人と関わるのがとても苦手です。高校の時に異質な人と関わる体験をしてから社会に送り出してやらなければ、林野高校の高校としての存在意義というのは少し薄くなるのではないのでしょうか。ですから、異質な他者と関わらせる体験をさせようということにしました。その中で、「自分たちで課題を発見しなさい」という進め方にしました。想定したも

のとは全然違う課題が出てくるかもしれませんが、「この問題を解きなさい」というように、まるでテストみたいに我々が課題を与えてその解き方をいくら習熟させたところで、課題そのものが我々にとって見えてこない時代がこれから先にあると思います。

「21世紀型のスキル」というのを静岡大学の島純先生に教えていただいたのですが、今ある課題というのは20世紀の知識では解決できないものがほとんどで、だとすると、21世紀の人間に何が求められるのかというと、「課題を解決する方法を自分で考え出すということ」だということです。課題を自分で発見して、こうすればよいのではないかとということを試行錯誤させていくことが大切だから、生徒には失敗をさせようということにしました。例えば、何かお祭りをして、「うまかったね」「よかったね」ではなくて、うまくいかなかったところから何かを見出していく試行錯誤を生徒にさせようということです。その中で、やはり生徒が自分一人で行えることというのは少ないわけですから、コミュニケーションのスキル、それからプレゼンテーションのスキルなども必要になってきます。総合的な学習の時間、MDPという時間の中でとても盛りだくさんにはなるのですが、やはりコミュニケーションスキルやプレゼンテーションスキルなどを身につけさせなければいけないだろうと考えました。その中で、地域の視点を入れていこうとしたわけです。林野高校を初めとして多くの普通科高校はそうだと思うのですが、大学に送り出すということを考えてしまうと、どうしても大学に行った生徒たちは田舎に比べて都会のほうがよいので帰ってきません。林野高校を卒業した生徒たちも地元に残りません。地元に残らないから、誰かが「林野高校ってどういうところ」と尋ねても「さあ」ということになってしまい、定員を割ってしまいます。やはり、今までないがしろにしていた地域の視点というものをここに入れていけばよいのではないかとということまで考えた時に、ESDの視点にかなり近づいてきたような気がしています。ふるさと教育というのをMDPの中で取り上げて「ふるさとの中でみんなが幸せになっていく、みんながふるさとについて勉強していくためにはどうすればよいのか」を考えていたグループがありました。今から思えば、そうしたところから、ESDが本校に入ってきたような気がするのですが、それが全体に浸透するには至りませんでした。これが平成22年の状況です。これについて先生方から出てきた不満の声は、「今までは自由に自分たちでできていたのに、地域という視点を入れられてしまったので、せっかくやってきたものがうまくいかなかったじゃないか」「自分たちがやりたいのは地域じゃないんだ」などでした。

逆に、あまり何もしなくてよかった先生方にとってみると、いきなり「このようにやりなさい」とトップダウンで指示がなされたので、「負担が増えて大変だ」、「ただでさえ授業があるのに」という言い方をされたこともあります。また、自分たちが取り組もうとしているグループの活動が例

えば心理学であれば、「それは地域に接続できない。心理学の人間がどうやって地域に接続できるのだ」とも言われました。私はそんなことはないだろうと思うのですが、その先生にしてみると「接続できないから無理だ」という言い方をされるのです。このあたりが平成22年に浮かび上がってきた課題で、ではどうしようかとなった時に、とにかく教員が集団を統一しなければならない。ベクトルをそろえるべきだということで、「行き先を探す学問から生きていく先を探す学問なのですよ」ということを強調するために、まずグループ名と構成を変えてしまいました。例えば、自然の不思議や環境問題に臨むというグループには社会学の面から環境問題を考えるという生徒がいます。今までの進路別、学部別で分かれていたものから、いろいろな志望を持った生徒たちが入り、そこから自分たちが取り組もうとするように、課題からグループを選ぶという形に変えました。教員のほうも、とにかくひたすら研修をしました。優良な実践を目の前にして、我々が何をしようとしているのかを先生方に意識づけていこうとしたというのがこの年です。

美作市というのはとても恵まれている面がありまして、総務省の地方再生の取り組みである地域おこし協力隊の方々が熱心に活動されています。美作市の上山棚田の再開発をしている、この方たちが、まず初年度に、とても深く関わっていただきました。この写真は、生徒が棚田のところに行って活動した後の様子です。こちらは美作市のボランティアガイドの方で、地域についていろいろと説明をいただいています。学校の中に閉じこもっていたのでは限界があるので、外に出ていこうということを考えて、あとから自分たちの考えたことを検証していきました。先ほど「失敗してもよい」と言いましたが、失敗してもよいという場面の中で、「むかし倉敷ふれあい祭り」という企画とその実施を考えました。生徒代表と地域代表の方とが実行委員会を結成しています。ここでフラダンスを踊られているのは地域の方々です。地域の方々の展示、上山棚田団の方々から出品してもらったもの、生徒たちが出品したものの展示・発表などを行いながら自分たちが考えている課題とその解決方法を考え実践してみよう、失敗したら、それを12月の実践報告会までに考え直してみようということで取り組んでいます。

平成24年からは、ユネスコスクールに加盟申請をして、「ユネスコスクール世界大会高校生フォーラム」の準備セミナー等にも参加をさせていただきました。去年は、隠岐島前高校の岩本悠先生をお招きしたり、ESD活動を熱心に行っていた3年生の生徒もいたので、市議会議員の方までお招きをして、ESDについての研修会をしました。これで、「ESDとは何か」ということが漠然と教員の中に伝わってきたような気がします。その中であまり変わったことをする必要はないのだという意識も持ってもらえたように思えます。

本校でははっきりとESDをやるということで、ESD担当のESD主任を校内に設けています。

わかりやすい説明の仕方として、「MDP（マイ・ドリーム・プロジェクト）」であったものを「Our Dream」に変えましょう、「私の未来というのは、私だけの未来ではない。私たちの未来ということで、考えていきませんか」ということで、年度当初の職員会議で説明をしていきました。この写真は夏休みに行いました「イングリッシュ・デイキャンプ」ですね。小学生たちが30人ぐらいと地域おこし協力隊の方々も含めると70人ぐらいの人たちでキャンプをしました。プログラムに国際交流が入っていて、美作市の国際交流ボランティアの方々に協力していただき英語を使いながらキャンプをするというものです。この企画は、地域おこし協力隊の「山村エンタープライズ」という組織の方々にやっていただいたプロジェクトになります。このように我々が100%企画をして運営するのではなくて、地域の方に企画運営をしていただくという活動もあります。

こうしたことの何がいいのかということなのですが、高校生は毎年かわってしまいます。我々教員も転勤があります。中心となるメンバーが転勤してしまうと、それから先何をしてよいか分からなくなるということがあります。その場合、どのようにしたらそれが防げるのかというと、地域の方を入れることです。地域の方はずっとそこにいらっしゃいますから、高校がやろうとしていることについていろいろなアドバイスをしていただけることにもなります。現在はOBやOG、後援会の方々が「林野高校が最近何かしているよね」ということでお手伝いをいただけるようになりました。このように学校の中だけの取り組みからどんどんと地域に広がっていくと、とてもよい取り組みができると思っています。

プレゼンで示している「未来～Future～」の図には、「協働」を中心に置いています。人によっていろいろな「時間」があります。企業に勤めていた方、我々のような公務員、それからずっと農業されていた方々と協働していく。それから、年齢、小・中学生と一緒に何かのプロジェクトをしてみる、大学生と一緒にしてみることなど、そういった年齢の違う集団との「協働」、当然地域の方々も含まれるでしょう。それから、「空間」ですが、都市に住んでいる方、それから田舎に住んでいる我々、それから校種の違いがあります。現在、本校で交流を進めさせていただいているのは矢掛高校と津山商業高校です。矢掛高校は県南の学校、津山商業は実業系の学校です。そういった異校種、つまり生活している空間の違うところとの「協働」も図っていき、これから先のESDの発展を考えようとしています。

本校の取り組みの課題のひとつは言語化に関するものです。矢掛高校のプログラムである「白石島プログラム」に参加をさせていただいた時にすごいなと思ったのは、全ての活動に言語化が伴っていることです。何か活動したら、それがそのままずっと流れてしまうのではなくて、必ず発表の時間が準備されていました。発表をすることによって、生徒たちは自分たちの取り組みや理解に欠けている

ところに気づくことができるのです。本校の生徒はそのことに気がつくことができ「矢掛高校の生徒はすごいね」と帰りの車の中で話していました。生徒の中にそのような変化をもたらしていくきっかけとして、やはり自分たちの活動を言語化していく中で、活動を再認識させていかなければいけないなど思っているのです。

それからもう一つは、我々教員側の課題です。これも白石島の時のことです。私はこの場にいたのですが、最も驚いたのは矢掛高校の先生方が生徒のことに口を出さないことです。どうしても林野高校の教員は、あだこうだと口出ししてしまうのですが、矢掛高校の先生はじっと見守って写真を撮られているぐらいでした。このようにして指導していくことがE S Dの中で大事なのであり、生徒たちの気づきを大事にするということも、林野高校の教員としては不足しているところだと思います。

我々は、E S Dなどない時代に生まれて大きくなりました。競争して相手に勝つことがいいのだというふうに教えられてきました。しかし、これからはそうではないのです。ということは、我々が知らないことを指導していかなければいけないということになるのです。我々教員自身が体験を積んでいかなければ、生徒たち、子どもたちに対して指導はできません。我々が学校の中に閉じこもってはいけないという気持ちを強くしています。

本校のキャッチフレーズ「Wings to fly」というのは「翼を下さい」という意味なのですが、本校のALTの先生にキャッチフレーズをつくってもらったらこのようになりました。「私たちは未来に向かって飛ぶ翼を持っている」ということなのですが、翼を持ちたい、つまり学校を変えていきたいという思いがなければ、E S Dにせよ何にせよ進んでいかないのだろうという思いを新たにしています。以上です。ありがとうございました。

○司会 住野好久（岡山大学大学院教育学研究科）

ありがとうございました。私の夢から私たちの夢へと広がっていったところがE S Dの視点を象徴的にあらわしているなど思いながら聞かせていただきました。

5. ワークショップ

(第1分科会)「ESDカレンダーを発展させる」

○司会 藤井浩樹(岡山大学大学院教育学研究科)

みなさま、本日はご参加いただきましてありがとうございます。私は、岡山大学大学院教育学研究科の藤井と申します。どうぞよろしくお願いたします。この分科会の司会をさせていただきます。非常に限られた時間なのですが、この分科会では「ESDカレンダー」を何とかつくりあげていただきたいと思います。実際には、中学校と高等学校の先生方で1グループ、小学校の先生方は4つのグループに分かれグループごとの作業をしていただこうと考えております。

これから、「ESDカレンダー」を作っていきますが、まず、どの学年のカレンダーを作成するかをグループごとにお決め下さい。例えば、私たちのグループは小学校6年生のカレンダーを作る、中学校2年生で作ってみるといようにです。こちらに教科書を用意しているのですが、教科書はそれぞれ1冊ずつしかありませんので、学年が重ならないほうがいいですね。

次に、総合的学習の時間の領域・テーマについて説明させてください。総合的な学習の時間について、「環境」「国際理解・異文化理解」「人権・平和」などいろいろな領域がありますが、1つの学年で複数の領域が存在するようなカレンダーを作っていく方法があります。それからもう一方では、1つの学年では1つの領域を重点的に取り組むという方法もございます。このことについて、どのようにするかも先生方で相談してお決めください。

では、作成の仕方を簡単にご説明します。最終的には模造紙にESDカレンダーを、何とかつくりあげてをゴールにしましょう。ESDカレンダーの様式は基本的に手島先生に教えていただいたような形で横軸に4月から3月、縦軸に教科、領域等ということで作成していきたいと思います。例えば一つの学年でESDの領域を3つ作られた場合には、各領域をそれぞれの色であらわして、これに単元名、教育内容を書いていただくという作業になると思います。あるいは1つの領域で作成していただく場合は、領域の中、例えば「福祉」という領域でもかなり細かくその領域内での内容の傾向の違いもありますので、それを表す色分けも可能かと思えます。付箋紙は3～4色ありますので、何らかの形で領域の違い、内容の傾向の違いといったものが示されるようお使いいただけたらと思います。そして、それから少しお考えになられる時に小さな付箋紙も用意しています。

それでは、活動時間は30分少々ということになるのですが、何とか完成していただいて、最後に各グループからコメントをいただきたいと思えます。

カレンダーを作られる時にはそれぞれの内容、単元のつながりというのが当然出てきます。ですか

ら、そのつながりがどのような理由からつながっているのかというところを特に重点を置いてご説明
いただくということで作業を進めていただきたいと思います。

(グループ作業)

○司会 藤井浩樹（岡山大学大学院教育学研究科）

作業の途中だと思うのですが、ここで各グループの発表をお願いしたいと思います。

○グループA

私たちのグループは、同じ中学校区の3つの小学校が集まりました。昨年度までにそれぞれの学校
でESDカレンダーを作っています。多少切り口は違うのですが、3つの小学校で6年生はすでに共
通のテーマを決めています。それにあわせてESDカレンダーを作りました。6年生の共通のテーマ
は「幸せって何」です。

色の違いについては、青はスキルのものです。それから、ピンクは「幸せって何」に関わる価値
観や心情面などを貼りつけてみました。青のスキルのものが多いのは国語でした。例えば国語の
「ようこそ私たちの町へ」というのは、インターネットを使った検索の仕方を学ぶということで青の
付箋を貼っています。それから、「平和について考える」「学級討論会をしよう」という学習でも根
拠をあげて発表するとか、自分の意見をまとめて伝えるというスキルの学習がとても多いのが国語で
す。算数も資料の調べ方、資料の整理ということで、調べた資料をまとめるという内容がESDにつ
ながるといってあげています。同じように、これは理科ですが、「人と環境」という単元が
あります。そこも世界の実情を知る、諸問題を知るというあたりでスキルの色の付箋を貼っていま
す。

○司会 藤井浩樹（岡山大学大学院教育学研究科）

心情的なところはどこになりますか。

○グループA

心情的なところは、社会です。社会で世界の諸問題を調べた後、一歩進んで自分には何ができるか
という学習があるので、心情的なところにあげています。それから、道徳で「世界がもし100人の村
だったら」という学習で世界の国の現状について知るところもピンクの付箋にしています。音楽など

も「ふるさと」という内容を取りあげて、自分たちの郷土のよさに気づく、郷土を大切にする気持ちを育てるということであげています。また、高学年の外国語活動でも2つほどあげています。世界についてしっかり知って相手に伝えようとするというところでピンクとブルーの付箋を貼っています。以上です。

○司会 藤井浩樹（岡山大学大学院教育学研究科）

どうもありがとうございました。では、グループB、よろしくお願いいたします。

○グループB

グループBは、中学3年生の総合的な学習の時間に人権や命の教育をプロジェクトにしているという想定で作成してみました。色分けは特にしていません。各単元とか内容の面で人権や命に関する単元のところを取り出してみたという感じです。取り出したものをそれぞれ主に内容的な面でどのようなつながりがあるかというのを線でつないで示しています。例えば複数の線が出ているものとして英語の授業では「I have a dream」という、キング牧師の公民権運動を取り上げた単元があるのですが、その内容であればいろいろな地域や国、その他の人権問題を扱うという点で社会科の「地球社会と私たち」という学習内容と絡めて何かできるのではないかと、また、「人間の尊重と日本国憲法」では、憲法が人権のことを法律の面からアプローチすることもできるのではないかと考えてつなげています。それから理科の「自然と人間」についても「社会に生きるデザイン」「ユニバーサルデザイン」などを扱っているところとつなげて自然と人間が調和するというようなメッセージを、デザインの学習内容に落とし込んでいけるのではないかなど、主に内容的な面でつながりを出してみました。以上です。

○司会 藤井浩樹（岡山大学大学院教育学研究科）

ありがとうございました。では、グループCよろしくお願いいたします。

○グループC

グループCでは小学校3年生について考えてみました。総合のテーマとしては「大好き甲浦」としました。甲浦は地域名です。郷土愛、自分の地域に愛着をもつというテーマで1年間取り組んでいきます。緑が「環境」に関すること、黄色が「人権や福祉」に関すること、青は「異文化理解」なのですが、3年生なので、異文化の前にまず自分の国、自分の地域の文化を知ろうということで、3つで

色分けをしています。

まず野菜づくりですが、理科で種をまいて育てて花を咲かせて実ができるという学習をしていきますので、それに絡めて「環境」という学習で野菜を作っていこうということを考えています。

2つ目の社会のところは緑なのですが、学区探検をするので、いろいろな施設を回ることによって福祉の勉強になると思います。例えば、老人ホームのデイケアセンターに行って、利用者の方からお話を聞かせてもらったりして交流ができます。交流をするので、最後にお話を聞かせてもらい、活動を通して何かお礼ができればいいなということで、お礼のカードを持っていくことにしています。2学期から3学期にかけては、昔の道具の学習と、国語ではカルタの学習をします。昔の道具の学習では、昔の遊びを学びますので、それを実際の道具を使って体験してみたり、地域に住んでいるお年寄りの方のお話を聞かせていただいたりして昔のことについて理解を深めます。

最後に、学区探検のところで実際に作った野菜を冷凍して届けることや、勉強した昔の遊びを一緒にしてみるなど、昔のことについて勉強したことを発表することによって最後に協力していただいた方にお礼のようなものができるかなと思います。

このように地域の方とつながって1年間かかわっていくことで、地域がもっとつながり、それがまた次の年につながっていけばESDの持続可能性にも役立つというように考えました。以上です。

○司会 藤井浩樹（岡山大学大学院教育学研究科）

ありがとうございました。では、グループDよろしく願いいたします。

○グループD

グループDの色分けですけれども、「環境」の中でもさまざまなテーマが出てくるということで、今回は資源エネルギー、ゴミのリサイクルなどを緑にして、絶滅危惧種等「環境」の中をさらに細分化した色分けにするという、少し変わったやり方かなと思うのですが、そういうやり方でやっています。いろいろ試してみまして、スキル面のことも全て各カテゴリーに分けてとりあげています。課題としては、5年生は「環境」に特化した総合と設定しましたので、このようにやってみたのですけれども、他の学年とのカテゴリー分けの整合性については課題もあるかなと思います。以上です。

○司会 藤井浩樹（岡山大学大学院教育学研究科）

ありがとうございました。では、手島先生、最後に指導助言をお願いいたします。

○手島利夫（江東区立八名川小学校）

すばらしい取り組みを見せていただいて、私は、本当にびっくりしました。約7年前に生まれた「ESDカレンダー」という考え方が、岡山の地にしっかり根づいて、それがさまざまな形のバリエーションとなって発展しているという姿を見せていただいて感動しています。それから、先生方の熱意にも、よくいろいろなことを理解されていることにも驚きました。教育委員会も一緒になってそれに進んで取り組み、後押しをさせていただいているということは、他ではなかなかできないことですので、すばらしいことだと思います。

最後に一つだけ、愛知県での事例を紹介します。愛知県の甚目寺小学校では、各学年の総合的な学習を一つの大単元で行っていました。ですから、上のカレンダーの部分は色分けをしないことができるというよさがありました。そこに国立教育政策研究所のいくつかの観点を入れて大単元の日当てというのをまとめるというようなやり方をしていましたので、参考になるかと思います。「愛知県でやっているからそのまねしなさい」ということでは全くありませんので、それぞれの学校で子どもたちにとってよいやり方をいろいろ工夫していただけたら、そこからお互いの学び合いが深まっていくのではないかと思います。私自身も大変勉強になりました。どうもありがとうございました。

○司会 藤井浩樹（岡山大学大学院教育学研究科）

手島先生、どうもありがとうございました。限られた時間の中で「ESDカレンダー」をつくる上でいろいろな視点が出て、非常に有意義な会であったと思っております。



(第2分科会) 「人権教育からESDを広げる」

○司会 住野好久(岡山大学大学院教育学研究科)

では、主に、中学校を対象とした人権教育をどのようにESDにつなげていくべきかというところで設定された分科会を始めたいと思います。この分科会では、まず井上先生のお話を聞き、その後ワークショップという形で進めていきたいと思います。では、井上先生お願いします。

○井上享子(松原市立松原第七中学校)

こんにちは。よろしくお願いいたします。

松原第七中学校の人間関係学科のお話を少しさせていただきます。本校では人間関係学科のことを「HRS」と呼んでいます。「Human Relation Studies」ということなのですが、子どもたちは「ホームルームスペシャル」と呼んでいます。というのは、普通のホームルームではない、何をしてくれるかわからない、何をさせてくれるかわからない、楽しみなホームルームということでそのように呼んでいます。簡単に言うと体験する中でいろいろと人間関係が深まっていく活動をしていこうという取り組みです。11年前に本校が文部科学省から「新しい教科を作ってみなさい」という研究開発の指定を受けました。この取り組みは「人間関係学科では、何すんの」「何で子どもたちに人間関係のトレーニングなんか必要なん」という教員の疑問から始まりました。しかし、今の子どもたちを見ますと、本日、手島先生もおっしゃっていたように、本当に外との関わりが下手なのですね。そのことからいじめが起こったり、不登校が増えたりという状況がありました。本校も、ご多分に漏れずに不登校生が多かったのです。この子たちをどうにかしたいという意味で、家庭と学校との中間ステーションをつくらうということで「ほっとスペース」というのをつくったのです。この「ホットスペース」をつくっても、教室にほっとできる居場所がなかったら教室復帰できないだろうということで、他の生徒、一般の生徒をトレーニングしていく中でこの状況を変えていかないといけないということになりました。いろいろな本を読んだり、人間関係をつくる体験型ワークショップを参考にさせていただいて、年間35時間、3学年105時間のカリキュラムをつくりました。取り組んでいく中で一番よかった点は、教師の団結力というのでしょうか、結びつきが大変強くなったことです。あるプログラムを実施するためには、まず教師が勉強し、体験しないといけないですね。子どもと同じように体験していく中で、気づかされる点が多くあります。わからないことをわからないと言う、きちんと話を聞くことができる、そういう枠組みや教師の間のつながりが大変強くなりました。いかにして子どもを楽しませるか、子どもたちの笑顔を見られるかという話をして「こういうワークショップにしまし

よう」と決めていく中で、やはり学校現場の教師間のつながりの深さが子どもたちのほっとできる環境を生むのだということもわかりました。はじめは、これで本当に大丈夫なのかと思っていたのですが、じわじわ子ども同士のつながりができてきています。このことは、漢方薬と似ていると思います。即効性はないのですが、じわじわと効いてくるのが、この人間関係のトレーニングであると思っています。現在は文部科学省の指定が外れまして、年間各学年約20時間で実施しているのですが、今までやってきたエッセンスを継続してこれからも続けていくことが大切であると思います。また、教師の入れかわりが大変激しいので、どこまでつなげられるかという心配はありますが、ベテランの教師が新しく来られた先生に対して説明していく中で、「あっ、こういうことなんや」という手応えを持ってもらうようにして今後も続けていきたい教科だと考えています。

この「HRS」の授業を受けた卒業生が卒業後、少しして本校に戻ってきた時に話す内容というのは、「先生、周りの子がきもい、きしょい、死ねっていう言葉をどんなに簡単に言うか。どきってすんねん。人のことをちゃんと理解していないからそういう言葉になんのん違うかなあ。違うっていうことが当たり前やって思ってへんからやん。それぞれの個性があって楽しいのにその個性を殺そうとする、その辺がちょっと今の高校の嫌なとこやね」などです。

そして、本校を卒業してしばらく経った卒業生は、本校の行事のボランティアメンバーとして戻ってきてくれます。今度は中学生を指導する側になってくれます。その卒業生が母校に戻ってくるたびに口にするのは、自分たちの仲間のきずなの強さです。どこできずなが強くなったかというワークショップをする中でいろいろな話し合いです。例えばすごろくゲームみたいなものがありまして、そのすごろくの中に「あなたの好きな教科は」という簡単な質問から「今の悩みは」のような難しい、言いにくいことまで書いてあるのです。そのすごろくをする中で話をする。そして、それをうなずきながら聞いてくれる。そのようにしてくれることで、自分のことを理解してくれようとするもののありがたさが感じられて友達同士のつながりが強くなったのだと思うのです。「話ししても、どんな話をしてもオーケー、何を言ってもオーケーという雰囲気をつくってくれるのが、七中の仲間やね」という話をするのですね。その仲間づくりの一つがこういうワークショップだったのではないかなと思います。

先ほども「大人モデル」というお話をしたのですが、「教師モデル」もあります。いろいろな行事をする前に寸劇を教師がします。子どもたちの前で「こんなことがあった時どうしますか」例えば、「掃除当番サボった、サボってないのけんかをしている場面」などを寸劇でみせるのです。すると、子どもたちは「あの一言はよくない」と指摘できるのですね。自分たちも言っているということは棚に上げてそれを言うのです。「それではどうするの」と言うと、「絶対今度からはその言葉は言わ

ん」というように、自分の姿に気づくのですね。そして、その次のステップに進むのです。本当に子どもたちが大人になっていく中ですぐ答えはでないと思います。一年一年成長していく中で、最近ではこの人間関係学科が少しエキスというのでしょうか、スパイスになっているのではないかと感じられるようになりました。

そこで、今日は少しみなさんに体験していただきたいのです。すみません、みなさんに立っていただいて、近くの人とじゃんけんしてください。引き分けたらペアになってください。4人1組をつかってほしいので、ペアになって、また同じように相手を探してください。そして、じゃんけんをして引き分けたらペアになり4人1組になります。では、始めてください。

さて、ここに新聞紙があります。この新聞紙は色とりどりでわかりやすいのですよ。何をしていたかかという、ここに出しておきますので、4人でよく見て相談していただいて、自分たちの使う新聞をこれにしようか決めていただけますか。何をするか。何でしょう。「皆さんジグソーパズルを知っていますか」というとわかると思うのですけれどね。これで似たような色のものを使われると難しいかもしれません。

「どれがいい」のか少し話し合ってください。決まりましたか。しっかり見ておいてくださいね。

では、今から日ごろの憂さをちょっとその新聞にぶつけていただくつもりで、新聞紙を、まず、2分の1に切ってください。はさみではなく、手で切ってください。それがいいのです。どんな大きさでも結構です。2分の1に。続いて、もう1回切ってください。4分の1になります。

そこまでいきましたら、もう1回切ってもらいましょうか。16分の1になりましたか。もう切り方はお任せです。どのように切っていただいても結構なので新聞紙を16分割していただけるとよいのです。そちらは個性的な切り方ですね。では、全部を集めてシャッフルしますね。

それでは、みなさんは座っていただいて、今から1人1回につき1枚だけこの新聞紙の断片を順番にとっていってください。とって戻ってみると間違えたという時がありますね。「これはなかった」とみんなに言われた場合は、次の回にそれを戻して2枚とっていってください。同時に終わるようにしますからね。16回とれば完成しますよね。セロハンテープを置いてありますから、それで新聞紙をつなげてもとの形に戻していただければ完成です。よろしいでしょうか。では、始めます。はい、1回目どうぞ。

では、2人目お願いします。どなたでも順番を決めていただいて。済みましたか。

では、3人目の方お願いします。つなげられる状態になってきましたらつないでいただいても結構ですよ。

では、4人目の方、よろしいですか。お願いします。そこは、早いですね。つながったのではない

ですか。

はい、続いて2巡目ですね。2巡目になりましたか。皆さん早いですね。目印があるのですね。

はい、続いていきましょう。皆さん早いですね。迷わないですね。

はい、続いていきます。皆さん早いです。一回でぴゅっととっていきますね。すごいなあ。

では、次行きましょう。どうぞ。3巡目でしたね。4巡目ですね。はい、お願いします。次がラストだと思います。素晴らしいです。たしか小さい断片もありましたね。大きいもの、小さいものがありましたね。

はい、ではもう一つですか。よろしくお願いします。

はい、では貼っていただいて完成しましたか。

さて、これで終わりではなくてこれからが肝心なのです。いまの活動を振り返ってもらいます。今日一番ファインプレーをした人は誰だったのでしょうか、少し話し合いをしていただいて理由を教えてください。一番のファインプレーをした方は誰でしたか、その際、それぞれ自己紹介をしてください。自己紹介が終わりましたら少し班で発表してもらいますね。こちらからお願いします。どうぞ説明してください。



○参加者 A

切り方を工夫しました。

○井上享子（松原市立松原第七中学校）

ファインプレーです。確かにこれはすごいですよね。私も見ていて、すごい切り方をしているなど感じました。早かったのはそのせいですね。この活動をする際、私は「しっかり見ようね」と子どもたちに言います。今回、皆さんは間違っただ断片を持っていかなかったのですが、子どもの場合は、間違っただ断片を持ってくる子に「おまえ」などと言って責めたりするでしょう。それを「まあまあまあ」となだめる子がいたりします。今回は、同時にしてもらったのですけれど、いつもは時間を計ってやるのです。1枚とってきたら次の人となると競争しますでしょう。そうすると、ひたすらセロハンテープを切っている子がいるのです。自分はセロハンテープを切るのが一番いいだろうというように、その中で自分の役割を見つけるのです。そして、「ここに並べてそこ、あそこ」と言って指示している子どももいます。そのようにしていく中で、自分の役割を、とても冷静に判断できたりします。そのようにして「あの子にあんなことがあったんや」「あの子にはあんないいところがあるん

や」という発見があります。そして、「一番のファインプレーは」「気づいたこと」「〇〇さんについてこういうことを気づきました」ということを振り返って書いてもらい、それを発表していく中で子供の見方が大きく変わっていきます。

ここの班は、大変よいことを言ってくれました。「最初から自己紹介をしなくてもワークをした後で自己紹介するほうが何か身近に感じられる」と言ってくれました。そういう感じになりますね。知らず知らずのうちに話をしています。話をすることでわかりあえる、自分を認めてもらえる。ファインプレー賞などと言ってもらえたらそれはうれしいですね。「よし、次も頑張ろう」ということになりますから、そういう喜びもあります。学校では大体7つか8つの班でやりますから、かなり難しく、本当に何が何だかわからない状態になってくるのですね。そこから完成できた達成感を感じられる。そのようにして何かに気づいたり、自分の中で考えが浮かんでくるというような形で「HRS」を進めているというのが本校の人間関係学科なのです。

どうですか、活動してみられて何か気づかれたこととかありますか。

○参加者B

自分はそのようなところを見ていなかったのに、他の人は違うところに気がついているなということがわかりました。

○井上享子（松原市立松原第七中学校）

そうですね、本当にいろいろな人がいろいろなところを見てくれる。自分は見えていなかったけれど、そこを見てくれていた子がいたのだというありがたさみたいなものもありますよね。他に、気づいたことなどありますか。

○参加者C

結構、単純な遊びなのですが、その単純な遊びに意外といろいろな発見が隠されていると思いました。

○参加者D

次、私の番だ、どうしようと思ったら「電話番号の続きのところだわ」などと教えてくれて、「そこ」「そこ」「ここよ」と言ってくれました。

○井上享子（松原市立松原第七中学校）

なるほど、ありがたいアドバイスですね。そういうアドバイスをいただいたりしますね。

○参加者E

最初に「しっかり見ておいてください」と言われた時には、写真にしか目がいってなくて、例えば、この小学生の顔だけに目がいていたのですけれど、もし次の機会があれば、こういうところを見ようかなと思いました。

○井上享子（松原市立松原第七中学校）

新たな学習ですね。なるほど。すごいですね、次につながりますね。

○参加者F

今、新聞をその授業に生かしていこうという大きな動きがありますが、先ほどのジグソーパズルの活動をしたら、多分新聞の読み方が違って来るだろうなと思いました。何もない中で新聞を読んで、これを教材にするというのも面白いような気がします。

○井上享子（松原市立松原第七中学校）

「HRS」のワークで教科指導でも教材に使えるものがあるのですね。これは自分の授業でも使えるよと感じる時があります。私の担当は国語ですが、説明文を学ぶ時に漫画を描かせたり、何かいろいろと工夫ができるなと思うのです。取り組んでいく中で教師の側で一番スキルアップしたことは、教材を練ることやどのような教材で子どもを引きつけることができるかという点で、これが結構プラスになっていると思います。美術の先生も、こういうジグソーパズルを作らせるなどをしています。このように、教師にとっては結構、教材開発や教科指導のスキルアップにつながるだろうと思います。

もう一つは、聞くというのはとても大切であるということです。よく傾聴と言われるのですが、耳を傾けて話を聴きなさいということです。私は皆さんが話している中で皆さんの会話を聴いていたのですね。それがこの授業にもつながりますし、子どもとの会話をする際にも役立ちます。振り返ってみれば、子どもの成長だけではなく、教師の成長にも役立つ学科なのではないかなと思います。「HRS」に関して本校では本も作成しております。先程、紹介していただいております。何かご質問がありましたらお知らせください。

○司会 住野好久（岡山大学大学院教育学研究科）

井上先生、どうもありがとうございました。私は、最後の1枚を引く順番になったのですが、最後の1枚がもう写真の下だから、もう簡単だよという簡単な1枚を残してくれ、かつ指さしていただきまして、私のような心もとない人間でも最後の1枚を無事とることができて、このグループの愛を感じさせていただき、本当に癒やされた時間だったと思いました。

今日の実践報告とこのワークも含めて井上先生にいろいろ聞いてみたいと思います。不登校の生徒も多かったし、大変な学校だったけれども、ユネスコスクールとして活動に取り組み、落ちついたということでしたね。そのあたりで先生にお聞きしてみたいなということがありましたらぜひお聞き下さい。たとえば、「うちの学校は今、このあたりで困っている」「あんなことで困っている」「生徒指導に追われて大変だ」などいろいろ困っていることがあると思います。グループの中で少し聞き出してみてください。きっと山ほど聞きたいことが出たのではないかと思います。その中から1つだけに絞って言ってもらいましょう。では、こちらのグループからどうぞ。

○参加者G

私の中学校は、今年ユネスコスクールに加盟しました。ユネスコスクールを進めるにあたって、これから難しい課題がたくさんあると思うのですが、何かアドバイスをいただければ助かります。

○参加者H

私の学校でも教室に入らない生徒が少しいて、荒れぎみ、荒れつつあります。教室に入ってくる、入らない子たちにこういうワークショップなどをさせる動機づけというか、その段階にもっていくまでの工夫などがあれば教えて下さい。

○参加者I

中学校もいろいろと忙しくて、時間のやりくりが大変なのですが、先生同士であれがいいんじゃない、これがいいんじゃないという話し合いの場をどう生み出されていったのかとか、それがどのような形だったのかという点を少し教えていただけたらと思います。

○井上享子（松原市立松原第七中学校）

まず、ユネスコスクールについてです。これをやりたい、あれをやりたいといってもわかりません。何ができるかわからないのですけれども、今やっていることをユネスコスクールの理念や協働と

いうところにどう結びつけたらよいかを考えればいいと思います。新しいことをするのは大変なエネルギーがいると思うので、今やっていることでこれは使えるのではないか、これはこのように変えたら使えるのではないかというのを考えれば結構、うまくいくのではないかと思うのです。新しいことをしようと思うととんでもない、お手上げ状態になります。

○司会 住野好久（岡山大学大学院教育学研究科）

小さく小さく一歩ずつということですね。

○井上享子（松原市立松原第七中学校）

やり始めた時に、まだまだ荒れの尻尾ぐらいはあったのです。まず、子どもたちがスペシャルと思ってくれるようになるために、楽しいことばかりしていました。

○司会 住野好久（岡山大学大学院教育学研究科）

進め方にも段階があるのですね。

○井上享子（松原市立松原第七中学校）

はい。本当に次から次へこれでもかというぐらい小道具を作りました。他の授業に出なくてもHR Sの授業にだけは出る子もいます。だから、その子どもたちが面白いなと思ってくれることが一番だと思い、楽しいことから始めるようにしました。今日は新聞紙を使った活動をしました。この活動は奥が深いのですが、表面的には大変楽しいと思います。子どもがその教室に行って、グループの中に入ってくれば、「面白そうやな」と思えば手を出します。ただもう、子どもがそこに行ってくれるだけでいいからというかたちで実施しています。

最後の質問は、回答が難しいです。

○司会 住野好久（岡山大学大学院教育学研究科）

時間をどのように確保していくのかということですね。

○井上享子（松原市立松原第七中学校）

そうです。実は今も思い出したくないぐらいです。やり始めの頃は本当に夜10時、11時までかかりました。また、小道具を作るのです。先ほど少しお話したすごろくトーキングのバージョンを変え

たいというので、スマートボールの板を作り入ったところに質問を作ろうということに取り組んだりもしました。でも、今は100円均一のお店へ行って何か使えないかなと思いながら、これは使えそうだなと思ったら買ってくるという感じになりました。大体これをやればよいということが分かってきたので、少しずつバージョンは変わっていますが、先輩教師から「子どもにこういう気づきを求めようと思っているから、これはこうやってね」という話を聞けば大体わかります。

保護者向けの啓発の劇も教師が1時間もかけて演じたのです。すごい鬼コーチ、鬼監督がいますし、夜9時、10時までどれだけ練習したことか。しかし、そうしていく中で教師自体もわかり合えますし、保護者も教師がそれだけ取り組んでいるというのがわかりますからとても協力的になりました。全然違いますね。今モンスターペアレンツと言われていますが、本校に苦情の電話かかってくるのは教員の車の置き方が悪いことや、駐車場のことぐらいで、子どものことで親が苦情を申し立てるということはありません。このようなありがたい副産物もたくさんできました。

○司会 住野好久（岡山大学大学院教育学研究科）

やはり、何か変わるときにはちょっと産みの苦しみも乗り越えなければならないのですね。しかし、そこ乗り越えれば、後は引き継がれていくわけですね。

○井上享子（松原市立松原第七中学校）

ただ、本校では教員の代替わりがあって引き継ぐのも今少し課題になっています。

○司会 住野好久（岡山大学大学院教育学研究科）

ターニングポイントを迎えているということですね。

○井上享子（松原市立松原第七中学校）

はい。本校では、今、それをどう乗り切るかが課題というところです。

○司会 住野好久（岡山大学大学院教育学研究科）

では、以上をもちましてワークショップ、第2分科会を終わりにしたいと思います。ご苦勞さまでした。

(第3分科会)「高等学校におけるESDをデザインする」

○司会 柴川弘子(岡山大学大学院教育学研究科)

第3分科会は、「高等学校におけるESDをデザインする」というテーマで、人数も少ないので、座談会のようなかたちで内田先生を囲んでお話をしたいと思っております。司会をさせていただき岡山大学の柴川と申します。よろしくお祈いします。簡単に自己紹介させていただきますと、実は内田先生と私はかつての同僚です。今は岡山大学のESD協働推進室でコーディネーターをしておりますが、数年前まで林野高校で一緒に頑張っておりました。林野高校は、目覚ましい変化をとげております。今日、一緒にまたこのようにしてESDについて協働できていることを嬉しく思っております。

さて、今日の流れなのですが、まず、みなさまに簡単に自己紹介していただいた後で、各学校の実践がどのような感じなのか簡単に説明していただき、その中で共通している課題を見つけ出したいと思ひます。そして、高校の実践の中でESDをデザインしていくうえで、それらの課題をどのように解決していけるかといった点を、時間をとって話し合いをし共有した後に、内田先生からコメントをいただき、何らかのまとめができればよいと思ひています。では、よろしくお祈いします。まず、内田先生、自己紹介をお願いします。

○内田浩文(岡山県立林野高等学校)

あらためまして、林野高校の内田と申します。教科は国語を担当しています。いろいろな先生方に親しくお世話になっておりますので、アットホームな雰囲気でお話し合えればと思ひています。わからないことがありましたら、本校から岸本も来ておりますので、よろしくお祈いします。

○司会 柴川弘子(岡山大学大学院教育学研究科)

それでは、小寺先生から順番に、簡単に自己紹介をお願いします。

○小寺裕之(清心女子高等学校)

清心女子高等学校の小寺と申します。本校はユネスコスクールに昨年度加盟をしまして、今年が私がESDの関係でお世話になっております。もともと私は県立高校で総社南高校で国際理解教育に取り組み、倉敷南高校にも勤めておりましたが、今は清心女子高校に異動してユネスコスクール・ESDの担当をしております。よろしくお祈いします。

○中村美和（桜丘中学・高等学校）

東京都の私立の桜丘中学・高等学校の中村と申します。よろしくお願いします。特に、私立の中学・高校ですので、生徒をどのようにして集めるのかが一番の大きな課題です。ユネスコスクールに関してまだ加盟申請が終わっていないのですけれども、すでに学校での取り組みを行っているので、それをいかにして申請にこぎつけるか、そして、生徒募集につなげるかというのが課題です。私自身は、実は教員ではなく事務職という立場なのですが、肩書は、グローバルキャリア教育推進コーディネーターです。よろしくお願いします。

○長谷川博之（岡山県立倉敷商業高等学校）

倉敷商業高校の長谷川と申します。教科は商業を担当しています。ESDという教育活動の内容は、まだわからない状態ですので、勉強させていただきたいと思います。よろしくお願いします。

○榎野滋子（岡山県立倉敷商業高等学校）

失礼いたします。同じく倉敷商業高校から参りました榎野と申します。国語の教員です。総合的な学習の時間が入った頃から自分なりに一生懸命やってきて、大変意味のあることだと思っていました。これまでやってきたことを今の学校でどのように生かせばいいかなという部分で、ESDに取り組んでみようと考えております。矢掛高校などの取り組みなどは少し知ってはいたのですが、正直少し敷居が高いかなと思っておりました。お話を聞いて、今やっていることをすりあわせるかたちで進めていけることもあるのかなと思いましたので、今日勉強させていただきます。商業高校でできるESDの方向性について学びたいと思います。よろしくお願いします。

○森田晋也（広島県教育委員会）

失礼します。広島県の教育委員会から参りました森田と申します。広島県の教育委員会にも昨年度より、初めてESD担当という部署ができて、私も昨年度着任して以来、本格的に関わっております。それまでは、高等学校の教員をしていたのですが、まだまだESDの勉強を始めたところなものですので、今日の研修会で理解を深められればと思っております。どうぞよろしくお願いします。

○江尻宏紀（就実高等学校）

就実高等学校の教員で江尻と申します。昨年まで岡山大学の学生で、今年社会人1年目ということで試行錯誤しながらがんばっています。ESDに関しては大学時代に少し関わっておりました。高校

に勤めだしてからも関わっていきたいと思っています。よろしくお願いいたします。

○馬木良輔（岡山県立真庭高等学校 落合校地）

失礼します。真庭高等学校落合校地から参りました馬木といいます。化学を教えております。江尻先生と同じく、この3月まで私も学生でした。4月から4ヶ月が経ちましたが、やっと学校現場に慣れたところで、もちろんユネスコ活動もESDも全くわからないまま、先輩教員に「行ってこい」「学んでこい」と言われて、こちらに参っております。協議には余り参加できないかもしれませんが、何か学びたいと思っております。よろしくお願いいたします。

○石田桂子（岡山県立矢掛高等学校）

矢掛高等学校の石田と申します。矢掛高校4年目です。ESDについて全国大会などで研修をしたかったのですが、私自身そういう機会に恵まれませんでした。本校でお二人の先生を中心に環境科があった当時、ユネスコスクールになり、いろいろなことをされてきたのを横から見ながら私もまねをしながら取り組んできたつもりです。今、その2人からどんどん広がり10人ぐらいの教員がESDに関わり、少しずつ取り組みも深まってきてはいるのですが、それを組織的にさらにどのように広げていくかということが私の課題であり、仕事かなと思っています。よろしくお願いいたします。

○安達一郎（岡山県立矢掛高等学校）

失礼します。矢掛高校の安達と申します。偶然この研修会のチラシを発見し、参加したいというこちらの思いを全て教頭先生が理解してくださっているので、気楽な気持ちで参加しています。私も矢掛高校に6年いるのですが、忙しそうだなと思いつつ、楽しそうだなとも思いつつ、ESDを横でずっと見ていました。今日、研修でいろいろな皆さんの情報をお聞きして、また自分に取り入れることができたらいいなと思っています。よろしくお願いいたします。

○長谷川康代（ベネッセコーポレーション）

ベネッセコーポレーションから参りました長谷川と申します。調査研究委員です。まだ新米なのですが、昨日申し込みをさせていただき、今日参らせていただきました。よろしくお願いいたします。

○岸本美紀子（岡山県立林野高等学校）

失礼します。林野高校の岸本でございます。いつも内田先生の前の席で「ああでもないこうでもな

い」と言いながら、いろいろと話をしております。私も同じ国語の担当ですので、教科の面であったり、「MDP」を担当者2人のところから組織的に広げていくにはどうしたらよいかということ、私も3年間でずっと研究しながら、最初に1人で突っ走るという状況でした。でもこれでは全然続かないということで、いろいろな先生方にもお声かけをしてきました。去年ぐらいから「MDP委員会」というものが組織化してきました。そして今年はコア委員会の中で、授業の合間に担当者会がもてるようになりました。ところが、そのコア委員会には、私も選ばれております。今年は、初任者の方が多く、いろいろ一緒にやっても3年で転勤をされ、コア委員会が一番持続不可能な委員会ではないかなどを言いながら、早く仲間を増やさないといけないと考えています。ただ、止まっただけは林野高校が沈んでいくだけです、無理のない範囲で、誰かが突っ走るのではなく「MDP」も教員全体で、学校全体で取り組む活動ですので、温度差があるところを調整するのは難しいのですが、頑張っただけでいきたいと思います。よろしくお願いします。

○島よう子（岡山県立岡山工業高等学校）

岡山県立岡山工業高等学校から参りました島と申します。よろしくお願いします。

私は、岡山工業高校は2年目ということになります。この7月に京山地区京山公民館を拠点としたESD活動の研究会があるということで、上司から声をかけられ勉強をしてみました。色々と呼び見しましたが、実際に自分の学校では何の実践もまだされていません。ただ自分の担当の中でしているさまざまな活動が、どういうかたちでESDと結びついていくのかなという思いもあります。また、プラスアルファとして、教員の中で勉強していくとか、ボランティア活動についてもどうESDと結びついていくのかということをご自分でまた考えさせていただければと思います。よろしくお願いします。

○司会 柴川弘子（岡山大学大学院教育学研究科）

本日は、岡山市からもお二人来ていただいています。よろしければ自己紹介をお願いします。

○浅井孝司（岡山市ESD世界会議推進局）

「I LOVE ESD」。このポロシャツを着ているので、すぐ分かると思います。まさに、来年、ESDの世界会議が岡山でありますので、その岡山市の担当部局が発足しています。「ESD世界会議推進局」というのは、来年の会議に向けて取り組んでおります。局には24名のスタッフがおります。学校の先生も何人か在籍しております。

私自身は、そこの局長ということで4月からおりますけれども、実は岡山での勤務も4月からです。3月いっぱいまでは文部科学省のE S Dの推進担当でした。途中、間がありますが、E S Dについては取りかかりの時から関わっていたということになります。

ユネスコスクールについていえば、現在、加盟数が580校ぐらいあります。21世紀、2000年を迎えた時にユネスコスクールを国としてどう展開していくかという時に、ユネスコスクールの20校の先生方と直接接触をしたことがあります。そして、これからもユネスコスクールとしての活動をしていくかどうかをその20校に判断してもらいました。なかには、ご自身の学校がユネスコスクールになっているということすら知らない学校もありました。残ったのは13校でした。その13校で2001年からスタートしまして、今のユネスコスクールの取り組みとなっております。

それが、現在、580校まで増えております。2005年以来E S Dは国連の取り組みとして推進しておりますけれども、日本では、ユネスコスクールの活動をE S Dということで位置づけ、本格的にユネスコスクールとE S Dを結びつけました。それが始まったのが2008年頃からでございます。こうして今、急速に加盟数が伸びてきているわけですが、世界的に見れば、ユネスコスクールというのは小さいものなのです。

学校のレベルでいうと、日本の高校に当たる学校の加盟数が世界の中では一番多いのです。日本の中では小学校が一番多いのですが、高校はまだまだ少ないのですね。今日、手島校長先生のお話があったと思うのですが、日本の小学校の仕組みが一番E S Dに取り組みやすい仕組みになっているからではないかと思うのです。来年は高校生を中心とした「高校生フォーラム」というのを岡山で開催するというので、今日、お集まりいただいた高校の先生方には、ぜひどのような「高校生フォーラム」になるのか楽しみにしていただきたいと思います。まだ、地元岡山からは具体的にどの高校のどの生徒が出るかというのは決まっていません。ただ、岡山の代表チームがそこに参加することになっております。これは開催地の特権なのですけれど、開催地域の活性化ということがありまして選ばれることなく岡山からは参加が決まっています。ぜひ岡山の高校生チームが来年11月の高校生フォーラムの中で、生き生きとした姿を見せてもらいたいと思っております。

今日は、議論に参加するというよりも、オブザーバーとしていろいろ聞かせていただきたいと思っております。口出しをするつもりもありませんが、何かあったらちょっとお話をさせていただくかもしれませんので、よろしく願いいたします。

○平井秀尚（岡山市教育委員会指導課）

岡山市教育委員会指導課の平井と申します。どうぞよろしくお願い致します。

私は小学校の教員として、高校でどのようにE S Dが進んでいるかというのを非常に興味をもって参加させていただきました。

○司会 柴川弘子（岡山大学大学院教育学研究科）

多くの疑問点と課題をもう既に出してくださった方もおられると思いますが、今お話をうかがった中で大まかに分けると、E S Dを学校で既に何年も実践されている学校とそうではない学校があるかと思えます。その中で、教員組織をE S Dをやっていくうえでどのようにして組織化していくかが1つの課題ではないかと思えます。もう一つは、それぞれの先生または各教科などで取り組まれているそれぞれの活動をどのように結びつけてE S D実践としてデザインをしていくのかという課題がありました。この2つが先生方の大きな疑問点ではないかと思えます。

もし、その2点以外で、ここで少し話し合ってみたいというテーマがあればこの場に出していただきたいと思いますがいかがでしょうか。よろしいでしょうか。では、この2点に絞っていきましょう。先輩校といったらどこになりますか。既に実践をされている学校から、この2点について、現状ですとか、もしこれまでに乗り越えてきたところがあり、乗り越えた結果よいことがあると思ったということがあれば、お聞きしたいと思えます。林野高校の先生には、一番最後にお話ししてもらおうと思えますので、少し早くから取り組まれている清心女子高校か矢掛高校の先生あたりから、組織化の問題ですとか、それぞれの活動をどういうふうに結びつけようとされておられるのか。何かありましたら、自由に発言いただきたいなと思えます。

○小寺裕之（清心女子高等学校）

私は清心女子高校には今年から勤務しておりますが、さっぱりわかりません。県立高校の総社南高校では、いつも思っていたのですが、ものすごい仕事量がありました。教員が代わった時に、いかにそれを継続するかといったことでは、いかに効率化するかが課題でした。今、組織化ということは非常に大事なことだと思えました。新しく学校をかわってみて、私立で自分がE S Dを担当していく際に、自分が中心となってやればよいというようなところで10年間ずっとやってきたものですから、逆に今、学校で何が行われているかということのを常々観察しながら、それぞれの広がりをもった活動を生かしていけるのが一番よいと考えているところです。まさに、いかに全体像を理解してE S Dとそれぞれの取り組みを関連づけていくのかということのを自分が理解し、それぞれの教員の取り組みを私や他の委員たちがつなげていくことが大切だということのを信じてやっていきたいと思っています。

○司会 柴川弘子（岡山大学大学院教育学研究科）

わかりました。ありがとうございました。矢掛高校ではどうでしょうか。

○安達一郎（岡山県立矢掛高等学校）

個人的に思っていることを述べたいと思います。組織化というはよくわからないのでそこは石田先生にお任せすることにします。実は今が一番大変な時期なのではないかなと個人的には思っています。矢掛高校は、環境教育というので環境科という教科を柱にして、ずっとやってきたのですけれども、数年前に、これは進路に生かせるのではないかということで、広げてきたのではないかと思うのです。この取り組みをつくり上げた2人の先生はこれを広め、教員に浸透していく際に、たぶん「待ち」の姿勢を通していたと思います。おそらく、それぞれの先生方が自分で意識をして取り組んでほしいということだだと思います。ですから、全ての先生で拡大していこうということはしていないのです。

E S Dに熱心に取り組んでいらっしゃった教員が数年前に1人転出して、今年も中学校に1人転出されました。したがって今は中心となって取り組んでいた二人がいないのです。それでは、どうしようかと言った時に、何人かのE S Dに関わっていた教員が何とか自分がつなぎにやっっていこうというのが、今の状況だろうと個人的には解釈をしています。

○司会 柴川弘子（岡山大学大学院教育学研究科）

その「待ち」というのは、個人的な発想なのですか。

○安達一郎（岡山県立矢掛高等学校）

はい。環境という授業の中で、「環境眼鏡」といういい方をしています。意識をしてみると、今まで見えなかったものが見えてくるようになっていくというものです。それを最近E S D、持続可能性というものに置きかえて考えているのですけれども、それに気づかないと、やはり自分のものにならない。教員も無理やりにやらされてるのでは自分のものにならないので、そこから気づくのを待つて、気づいて自分で取り組んでほしいという思いを、私も個人的には大切にしています。

○司会 柴川弘子（岡山大学大学院教育学研究科）

「環境眼鏡」というのは、そういう概念があるのでしょうか、それとも誰かがつくられたのでしょうか。

○安達一郎（岡山県立矢掛高等学校）

たぶん、そのお二人がつけられた言葉だと思います

○司会 柴川弘子（岡山大学大学院教育学研究科）

お二人がつけられたということですね。

○安達一郎（岡山県立矢掛高等学校）

そういう視点で見てもよいということです。

○司会 柴川弘子（岡山大学大学院教育学研究科）

そのキャッチフレーズは矢掛高校の中ではいつごろから使われているのですか。

○安達一郎（岡山県立矢掛高等学校）

私が知ったのは4年前ぐらいです。

○司会 柴川弘子（岡山大学大学院教育学研究科）

じわじわと広がっているということですね。

○石田桂子（岡山県立矢掛高等学校）

平成22年だと思うのですが、学校の組織を変えたのですね。ESDをベースにして普通科と、地域ビジネス科を立ち上げました。そのESDというのは一体何かというと、普通科探究コースの場合は「環境」を立ち上げました。総合コースでは「やかげ学」が中心となりました。それから、地域ビジネス科は「課題探究」というのを中心に置いて、一応カリキュラムでは成立はしたのです。その環境というのは、1年生が全員学ぶのですが、それも今、どんどん短縮されています。2単位だったものを1単位に、今は総合的な学習の時間の中で1年間10数時間のみ「環境」をしています。その環境をしているメンバーに安達先生が入った時には「環境眼鏡」を知るのみで、「環境」を担当しない教員は誰も内容を詳しく知らないのです。教員の側は、「環境」を担当した教員は知っているけれども、「環境」の担当ではない教員は知らないという状況が起きているようです。ですから、環境科に今、特進環境科がいて、「環境」の授業を1年と2年と3年があるので、それを繰り返してやっているのですが、担当になっていない教員には全くユネスコスクールやESDについての理解を図ることがで

きていません。一応、教員研修を年に1、2回はするのですが、そこではESDは大風呂敷を敷いたような感じになっています。実は、自分たちの教えていることの中で本当はESDの視点でいろいろ教えられるのですが、そのような視点がまだないのです。私の責任でもあるのですが、インターバルですから、そういう視点でカリキュラムを考えてもらったり、シラバスを考えてもらったらよいのですが、そういう動きはほとんどないという現状です。こうしたことを全体に発信することが必要であると思います。

○司会 柴川弘子（岡山大学大学院教育学研究科）

よくわかりました。他に何かご質問ありますか。

○女性参加者

今日も手島先生の話の中で、ESDの教育の中に4つの柱というのが「環境」と「異文化理解」と「人権」と「国際システム」ということだったのですが、矢掛高校の場合には環境科の学習の中で、4つの中の環境教育を中心に行っていらっしゃるということでしょうか。

○石田桂子（岡山県立矢掛高等学校）

スタートは「環境」でした。しかし、「環境」だけでは少し専門的な話になってしまいますので、「やかげ学」のような、地域との連携というのを加えて「地域学」ということで進めております。「国際理解」とはまた違いますが、「異文化理解」や「異世代交流」などの視点もありますので、ESDとして取り組んでいます。それから商業科の課題研究も地域のいろいろな声を聞き、地域の特産物を生かして商品開発をしていくという「地域理解」「地域交流」の視点でESD化することにしていきます。結構、何でもESDになるなというのが私たちの今の発想です。

○司会 柴川弘子（岡山大学大学院教育学研究科）

他にありますか。では、林野高校における組織化の面と、それぞれの活動をどう結びつけているかについてお聞きしたいと思います。どちらもご苦労されてきたようでしたが、内田先生のプレゼンテーションの中でもデザインするという点に関していくつか示唆がありました。こちらが教えてしまうのではなく、生徒の気づきを大切にすることなどにもコメントがございました。よろしければ、岸本先生にもコメントをいただきたいと思います。

○岸本美紀子（岡山県立林野高等学校）

まず、組織化というところから話をさせていただきます。途中で大きく方向転換をしたというお話がプレゼンテーションの中でもあったかと思うのですが、学び方から生徒の生きる策として、どのように取り組みを変えていくかという話をする時に、我々教員全体がなかなか追いついていけないというので、教員研修を度々実施しました。教員研修のやり方というのは、1つは、先ほどの総合的な学習の実践などを、優れた先生方に見ていただきました。また、校内だけではなく、現地で研修をすることもありました。我々教員が生徒に課題を発見させ、その課題をどう解決していくかを考えさせるといった時に、我々もやはりアイデアをもたないといけないということになります。教員も地域の方を講師として来ていただきながら、何人かでそのグループを担当することになります。ですからまず、この地域にどのような課題があるのかということを経験でも考えました。例えば生徒にいいアイデアが出なかった時に「例えばこんなアイデアがあるよ」という指摘をしたらよいのではないかというお話もいただいたりして、まずは教員が考えてみようというところから始まりました。

実は、私は理美容グループを担当しています。3年前はひどい状態で、はっきり言って理美容に集まってくる生徒は、全く地域の課題解決や持続可能な社会ということとは縁遠い生徒でした。先生方もただ単に生徒の世話をするというところから活動が始まりました。それではあまりにも内容が少ないということで、去年ぐらいから少しずつ変わってきました。今年は何をしているかといえば、外見の美や内面の美について学んでいます。内面の美しさや真の美しさというのは、どういったところから来るのだろうかということを考えたときに、果たして今のシャンプーやリンスなどの成分はどのようなのだろうか、それは環境に悪くないのだろうかと考えています。たまたま、そうしたことを考えている美容師さんがいらっしゃいましたので学校に来ていただいてお話をうかがいました。やはりその方も実際に髪の毛を染める染料を垂れ流しにすると環境に非常に悪いということで、自分たちがしていることが恐ろしくなったと話しておられました。それで、今は色が染まるぎりぎりの程度まで薄めた自然素材のものを使っているという話も聞きました。自分たちが何げなく使っている、自分の外面を美しくするものが、実際の真の美しさにつながるのだろうかという視点からあらためて考えていった時に、持続可能な社会との接点が見えてくるのではないかと考えています。

今は、そういったことを教員同士でまず話をしておき、それを生徒にも少しずつ学ばせようとしています。本当は生徒の気づきを待つのが一番よいのかもしれませんが、気づきを待ちながらも、教員としては少しずつ成果についても考えていくという視点も必要なのではないのでしょうか。

それから、重要なことに「出会い」というのがあります。人との出会いということもあるのですが、自分とは違う考え方、あるいは自分の中にもっていなかった考え方との出会いもあるということ

で、それは教諭のほうで設定しています。これには生徒が「こんな人に出会いたい」というところからヒントを得ました。気になる点もあるのですが、そういう心に少しずつ刺激を与えながら、生徒に持続可能な社会への感性を高めるよう導いていこうとしています。そのためには組織、教員集団もしっかりしていないといけないところから環境づくりも進めています。新年度、新体制になった時に新しく来られた先生方も交え、連携しながら今年はどうしていこうと考えてきました。

それから、時間割が複雑なので計画的にはとれないのですが、今年はある程度長時間、できる限り皆さんの空き時間を使いながらすり合わせをしていこうと考えています。

それから、「MDP」の代表の先生に集まっていただきました。基本的には「MDP委員会」の準備が週1回あります。それは場合によっては2時間連続ということもあります。「MDP」が行われる前には、「MDP委員会」を開き、「今回はこういう趣旨でやっていきましょう」ということを話をしながら進めていきます。このことによって「福祉」のグループは、獅子舞を取り入れながら、福祉施設で体験を重視しながら教員が一緒になって取り組んでいくようになりました。

教員が面倒くさいものではなく、やっぱり楽しいと思わないといけないなということと、少しずつ全体でということを考えております。

○内田浩文（岡山県立林野高等学校）

総合学習をしながら授業をしているので、生徒の中から答えを探していく。それに対して、「そんなことをして何か意味があるのか」というのは、常にあった反論なのです。授業進度が遅くなる等の批判もあります。同じことがたぶんESDにもいえて、「ESDをして何の意味があるのだ」という教員もいるのです。ですが、遠回りにみえるけれども、実はやってることは、生徒の未来のためにしていることなのだということに気がつけば、がらっと変わるような気がします。

本校でも、残念ながら3分の1ぐらいは相変わらず「そんなことやったって」と言う教員がいます。問題は、その3分の1をどう変えていくかということですが、なかなかうまくいかないのです。ですから、外堀を埋めていくしかないかなと思うのです。広範囲なように見えていても、実は未来のため、これからどうしても持続発展可能な社会にしないとイケないのだということに我々が気づいて、「それではどうしよう」というふう考えた時に評価も変わってくると思います。そのようになると、おそらくうまくいくのかなという気がします。

○浅井孝司（岡山市ESD世界会議推進局）

教員の組織化ということで、今日は広島県の教育委員会の方が来られています。たぶん他の都道府

県の教育委員会で広島県のようにESDに取り組んでいる教育委員会というのは、ほとんどないといっても過言ではありません。広島は、県の教育委員会が組織化を非常に熱心にされているということで、お話が聞けると思います。

○森田晋也（広島県教育委員会）

広島でも以前はトップダウンで、上がこうやるというからやれということでした。高校のユネスコスクール加盟校は14校あるのですが、その数字を出すと皆さんは「多いね」と驚かれるのです。しかし、そのほとんどが校長や職員組織が自発的にやろうということで加盟している学校ですが、最初はまだまだ入りなさいという感じでした。

ただ、やはりぎりぎりの組織だけで展開している学校は、課題があります。非常に強力に推進される先生がおられる場合にも困難もあります。奈良のESD全国大会で広島県から先生がパネルディスカッションに参加された高校があります。その大会に参加された先生は国語の指導教諭の先生でしたが、英語の免許も持っておられていたので両方の言語をフルに活用させて、リアルな英字新聞を作らせることや、生徒に英語で発表をさせるといった取り組みをしておられました。その先生とも何回か話す機会がありました。自分は1年後には転勤するので、自分の取り組みというのを、今いる先生方に残しておかなければならないということを考えられていましたが、特に最近はあまり前に出ないようにしているようです。先生たちのために自分がしてきたことを、できるだけ記録に残しておくことにしたそうです。例えば会議などで発表する時にも、自分が言うとき周りの人が「ああ、またあの先生が」という感じになるので、自分が中心となり現在進行形で活動に取り組んでいるとき以上に気を遣っていると述べておられました。

○浅井孝司（岡山市ESD世界会議推進局）

どの学校もスタート時には本当に熱心な1人、2人の先生が引っ張るかたちで始まっているというのは同じだと思うのです。その先生がいなくなってしまうと、途端にその活動が停止してしまうというのは、やはりESDに限った話ではないと思います。ESDの持続可能ということで答えればいいのですが、学校でESDを伝えていくために組織化を進めるというのは一つの大きな動向です。例えばESD委員会をつくり、各学年からその委員会のメンバーを選定して、月に1回ぐらい定期的にESD委員会で進捗状況をチェックしていくなどの仕組みをつくっていくのは理想的ではあると思うのです。そうすれば、校長の理解に限らず、委員の先生方、その学校の中で全ての先生が理解して活動するということになります。これは極めて難しいのですが、そうした組織化を図っている学校も実際

はあります。

例えば私が知っている限りでは福岡県の城南高校や武蔵台高校では、そうした委員会をつくって運営をしています。また、大阪の場合は「大阪ASPnet」といって、大阪のユネスコスクールが組織をつくっています。このように各学校のユネスコスクールの担当、E S Dの担当の先生方が月に1回程度集まって、学校を超えて問題点を話し合っ、相談をしながら活動を進めていくというような手法をもっている地域もあります。

やはり、どうしても1人や2人の先生で取り組んでいくというのは、在籍期間も限られているため、限界があるのです。できる限りその学校の中で理解者を増やしていく、先生方の仲間をつくっていくということが非常に重要なことだと思います。

○司会 柴川弘子（岡山大学大学院教育学研究科）

ありがとうございます。大変申しわけないのですが、時間が限られていますので、ここで全体を大まかにまとめます。組織化の問題について、しっかりとした組織をつくっていく際には、反対する人や理解がない人はいるものの、持続可能なかたちの教員組織をつくっていかなければならない。それから、それぞれの活動をつないでいくためには、教員自身の引き出しをたくさんつようにする。そのためには、いろいろな研修機会を活用するとか、さまざまなことに興味を持って地域や社会へ出ていくということも必要ではないかということであったかと思います。

もし、個人的にご質問等ございましたら、E S D協働推進室のほうへご質問いただければと思います。E S Dをこれから岡山県あるいは日本全国へ進めていくためにも、先生方にはぜひネットワークをつくっていただければと思います。

拙い司会で申しわけありませんでした。今日は、本当に内田先生、そして皆様ありがとうございました。



6. 閉会式

○司会 住野好久（岡山大学大学院教育学研究科）

皆様ご苦労さまでした。3つの分科会を通して学校におけるE S Dの持続発展についての見通しがそれぞれ深まったのではないかなと思います。

それでは、これから閉会式に移りたいと思います。まず、岡山市のE S D世界会議推進局から浅井局長が来られていますので、岡山市の2014年に向けての取り組みなどを少しお話いただければと思います。では、よろしく願いいたします。

○浅井孝司（岡山市E S D世界会議推進局）

皆様こんにちは。今日は大変暑い日ですが、午前中から研修を受けている方もいらっしゃると思います。本当にお疲れさまでした。午後のこのユネスコスクールの研修会でもっと議論をしたかったという人がたくさんいるのではないかと思います。実は、私は途中からの参加でしたので、最初の手島先生のお話が聞けなかったのですけれども、手島先生が何を話されたかは大体はわかっております。

ユネスコスクールは今は580校を超えて、止まることなく増え続ける感じになっています。来年の11月の初めには、この岡山で「ユネスコスクールの世界大会」を開催します。世界大会ではどのようなことをやるのかということは、実はまだ決まってはいません。現在、文部科学省の中で委員会をつくって、プログラムの中身をいろいろ協議しております。実はそのプログラムの中身の協議をする会議が昨日の午後、文部科学省の中でありました。手島先生もそのメンバーですし、岡山大学の川田先生もメンバーです。岡山市からも私や教育委員会の指導課長が参加しています。世界大会で、実はメインの企画になるのが「高校生フォーラム」です。世界の各地域から教員1人と生徒4人の計5人のチームが33チーム、日本からは9、合計42チームが参加してフォーラムを開催します。テーマは当然E S Dです。自分たち高校生が考えるE S D、あるいは高校生がこれから未来に向かってどのようなことをしていきたいかということ、実践的・行動的な思い、を是非話し合っていたいただきたいと思います。

その他にも教員によるディスカッションをしたり、毎年開催されている「ユネスコスクール全国大会」も、来年は世界大会に合わせて岡山でこの岡山大学の会場を借りて実施予定となっております。

今日もいろいろとESDについての話があったと思います。県内の林野高校の話聞いて非常によかったのは、改革の話です。その改革過程自体が聞いていてまさにESDだというのがよくわかりました。ここには実際にESDに携わって一生懸命取り組んでいらっしゃる方も、これからESDを学んでどんどん知っていこう、あるいは学校で実践していこうという方々もいらっしゃると思います。先ほどよりいろいろと出ていると思いますが、「気づき」「つながり」「行動」「実践」がESDにとってのキーワードになります。「つながり」ということは、要するに自分1



人であるわけではないということですね。今日ここに集まれた皆様は、まさにこの研修会でESDにつながるきっかけができたと思います。これからも学校へ帰られるといろいろな困難もあるかと思っています。ただ、岡山県内にはESDを推進しているたくさんの先生方がいらっしゃいますし、日本全国でもESDはどんどん広がっておりますので、いろいろなコミュニケーションがとれる場がございます。文部科学省もそうですし、この岡山大学もASPUnivNetといってユネスコスクールのいろいろな支援をいただいている大学の一つであり、なおかつ今年と来年は事務局をいただいております。住野先生や川田先生も一生懸命取り組んでいただいておりますので、相談にもすぐのってくださいと思います。また、いろいろなアドバイスもいただけたと思います。これからぜひ、来年、岡山で開催される「ユネスコスクール世界大会」を楽しみにして、皆さんの学校でユネスコスクールにまだ加盟していないところはユネスコスクールに加盟していただいて、ESDを推進していただきたいと思いますというのが私の願いでございます。今日はどうもお疲れさまでございました。

○司会 住野好久（岡山大学大学院教育学研究科）

ありがとうございました。それでは最後に、この研修会を共催というかたちで開催していただきました岡山市教育委員会指導課の平井課長補佐にご挨拶をお願いいたします。

○平井秀尚（岡山市教育委員会指導課）

それでは、本日の振り返り、応援を言葉にかえてということでお話をさせていただこうと思います。今日、私は3人の先生、手島先生、それから井上先生、内田先生から次のようなことを学ばせていただきました。

1つ目ですが、改めて何よりも子どもが主役だということを痛感いたしました。

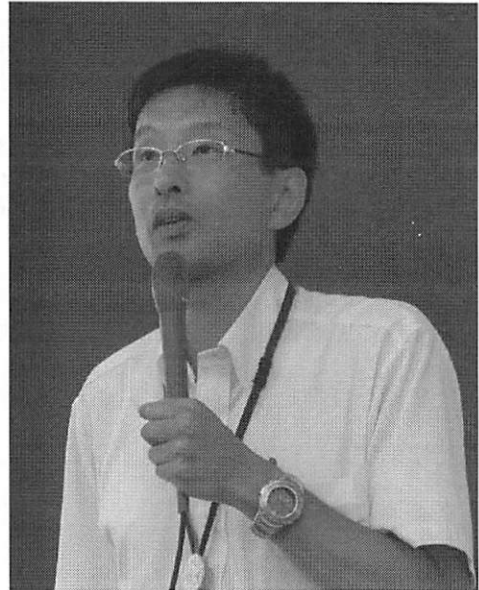
2つ目、まずは学校として一歩踏み出すことの大切さも、3人の先生方のお話から感じました。

3つ目として、学校の職員全員が同じ方向を向いて取り組むこと、言い方をかえますと組織化ということが大切なのだなと思いました。

さらに、地域の方や地元の事業所をどのようにして巻き込むかというのが、これの成功の鍵なのだろうなということを感じました。これでこの会を終わりますが、本日の参加者で是非つながっていただきたいなと思っています。これからがスタートだと思います。

具体的に申しますと、先ほど浅井局長が申しましたように「一人の百歩よりも百人の一步」ということ、それからここにはたくさんの仲間がいます。小学校、中学校、高等学校の先生、企業の方、さまざまな方がおられます。もちろんこれを主催してくださった大学の先生、それから我々の仲間である市役所の職員、そういう仲間がたくさんいます。これを機に情報交換や交流が進むとありがたいと思います。

そこで、一番つながる一つの方法として、これが終わった後にぜひ名刺交換をしていただければと思います。私事ですが、昨年度金沢の浅野川小学校の西野先生がこの場で発表してくださったのですが、この会が終わった後に名刺交換をさせていただきました。本年度になってどうしても困った時に浅野川小学校に電話をして、「これはどうするの」と聞いたら本当に丁寧に教えてくれたのですね。名刺交換というのは具体的に相手の連絡先がわかるというすばらしい手段だと思いますので、これからがスタートです。皆さん、ぜひチャンスがあれば名刺交換をしてください。本日はありがとうございました。



○司会 住野好久（岡山大学大学院教育学研究科）

ありがとうございました。お帰りになられる際は、ぜひ手島先生の名刺もしっかりもらってお帰りください。今日のこの研修会の成果につきましては、報告書にして全員で共有できるようにしたいと思っていますので、楽しみにしておいてください。

では、これでお開きにしたいと思います。まず、3人の登壇された先生方に感謝の拍手をお願いいたします。ありがとうございました。そして、本日一緒に学び合った労をねぎらう拍手を皆さんに送りたいと思います。ご苦労さまでした。気をつけてお帰りください。